

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔法先生ネギま！ 同室のお兄さんズ

【作者名】

ひろちゃん（すぴ出身）

【あらすじ】

魔法学校を卒業し、修行の為に日本で学校の先生をする事になったネギ・スプリングフィールド。しかし彼は『転生者』の影響を受けて萌えを愛するオタクと化していた。

そんなネギを孫と（女の子と）同室には出来ないと考えた近右衛門は男子の魔法生徒2人にネギを託す事にする。しかし近右衛門は知らなかった、2人の魔法生徒が『転生者』であることに。そしてその内の1人の持つもう1つの姿を…

*このお話は魔法先生ネギまと魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーですが、なのはの方は『すぴばる』に投降している2次創作『新・親戚のお兄さん』の世界になっています。そのためあちらで出てきたオリキャラや設定が変わったなのはの原作キャラが出てきます。しかし『新・親戚のお兄さん』を知らなくても分かるように書きます。知っている人はニヤリとし、知らない人はそのまま楽しんでください。尚この感想で『新・親戚のお兄さん』のネタバレはご遠慮願います。

第1話

side ユウ

「よし、準備完了」

焼きあがったケーキを箱に詰めると俺は1人そう呟いた。ここは麻帆良学園のクラブの1つ菓子総合研究会（通称菓総研）の部室だ。このクラブに所属している俺は今朝学園長から連絡を受けてケーキを用意していたのだ。

「なに、なにユウくん、ケーキを持って何処行くの？」

俺がケーキを持って部室を出ようとするとクラブの娘が声をかけてきた。このクラブはお菓子を作るのがメインの活動なので女子が多い。その為男子の俺が変わった事をする目だってしまうのだ。

「学園長から連絡が有って大切な客が来るからケーキを用意してくれって」

「ああ、ユウくんのケーキは美味しいからね」

自慢ではないが俺のケーキは美味しいと評判で人気が高い。菓総研で作られるお菓子は先生達のお茶請けや茶道部などのお菓子を必要としている所に届けられる。その為俺を始め何人かの部員にはリピータがついたり人気有ったりする。

「え、大切なお客さん？もしかして学園長の義息子が来るの？」

俺達の話聞いて他の娘達が話しに加わってきた。

「とつとつお義父さんに紹介される日が来たんだ」

「え、ユウくんが彼女のお父さん」と「対面!？」

学園長に來客という話が女子達の手によって変な方に曲げられてしまった。俺は学園長のお孫さんと付き合っているので恋愛方面でも話題にされやすいのだ。

女子達がわいわい騒いでいるせいで部室から出られずに困っていると、不意にバン！と大きな音がした。音のした方を見ると初等部の『妹』が焼きたてのケーキを台の上に落としていた所だった。（誤解の無いように言っておくが、ケーキを焼いたとき台の上に落とすのは製法の1つとして実際にある）

麻帆良学園は小学校から大学までのエスカレーター式なので菓総研を始めいくつかのクラブ、部活は小学生から大学生まで一緒に活動している。だから中等部の俺と初等部の妹は同じクラブで一緒に活動している。もつとも最近は反抗期に入ってしまったのか俺の事を名前で呼んできたり、世話を焼こうとすると嫌がったりして同接すればいいのか悩んでいるのだが……

とにかく、皆の注意が『妹』に行った際に俺は学園長室へ向かった。学園長室は何故か女子中等部の校舎の中にあって男子には敷居が高いが、俺はよく学園長にお菓子を届けているのでいつものように後者の中に入っていった。

「学園長、ユウです。ケーキを届けに來ました」

「うん、入りたまえ」

学園長の許可が出たので部屋に入ると、そこには学園長だけではなく学園寮で同室のであるパルジファル（愛称はパルジ、名前のとおり外国人で金髪碧眼の美形）がいた。

「よく来てくれた。ユウくんケーキはそこに置いておいてくれ。実はな2人をお願いしたい事があるのじゃ」

学園長は俺が部屋に入るとそう言った。どうやら目的はケーキだけでは無く他にも有るようだ。そして俺とパルジの2人を呼んだとすると用件は……

「そう、魔法生徒である2人を呼んだからには用件は魔法絡みじゃ」

魔法生徒……。この学園の生徒で見習い魔法使いの事をそう呼ぶ。この麻帆良学園は表向きは学園都市なのだが裏の顔として関東魔法協会という魔法使いの組織の拠点という顔を持っているのだ。

「とはいえもうすぐ木乃香達が戻ってくる。分かっているとと思うが木乃香の前では魔法の話は禁止じゃぞ」

木乃香というのは学園長のお孫さんで俺とお付き合いしている子だ。れっきとした魔法使いの家の子なのだが父親の教育方針で魔法の事は秘密にしている。しかし祖父である学園長はその事を勿体無く思っているらしい。魔法生徒である俺とのお付き合いを黙認しているのはその為なのだろう。

学園長の言うとおりそんな話をしてすぐ木乃香さんが部屋に入ってきた寮で同室のアスナちゃんと一緒にもう1人……10歳くらいの男の子を連れている。

「学園長、ガキンチョ……もといネギ先生の案内をしてきました」

アスナちゃんは学園長にそう報告をした。それにしてもネギ……先生？

「『苦勞じゃったな。報酬はここにある』」

学園長は報告を聞くと俺の持ってきたケーキを差し出した。

「やったー！木乃香、ユウさんのケーキよ！」

アスナちゃんは俺の作ったケーキを手にとると喜んで木乃香さんに声をかけた。

「アスナ、そのユウくんはここにおるで」

ケーキに目が言っていたアスナちゃんとは違い、木乃香さんは俺の事に気づいていたのでアスナちゃんにそう言った。

「え、やだ私ったら」

「気にしないでいいよ。ケーキの事をそこまで喜んでくれると俺も嬉しうし」

「そろそろいいかの、まだ話があるのじゃが」

恥ずかしそうにしているアスナちゃんにそう言つと、学園長が注目するように言った。学園長の方を向くと学園長はネギと呼ばれた少年を俺達に紹介した。

「木乃香達には説明したがこの子はネギ・スプリングフィールド。ワシの知り合いの紹介で中等部女子の先生をする事になったのじゃ」「学園長……」の子の歳は見た目どおりですよね」

木乃香さんのクラスメイトには見た目と年齢が合わない娘が多いので念のために聞いてみた。

「そうじゃ、今10歳になる」

「10歳の先生を認めるのなら俺の大学部への飛び級を認めてください。」

俺がそう言つと俺が言った事が意外だったのか学園長を始め部屋にいた皆が拍子抜けした顔をした。

「普通、この歳で先生はおかしいとかツッコミをいれるじゃろ」

「…もう、諦めていますから」

学園長がそう言つと俺は学園長から視線をそらしてそう言った。

「そ、そうか(汗)まあいいじゃろ。じゃがお前さんの飛び級はご両親から学園生活を満喫させて欲しいという要望があるから駄目じゃ」

学力だけなら問題ないがのと続けながら学園長は俺の要望を却下した。

「話を戻すぞ。彼、ネギ・スプリングフィールドを先生として迎え入れたのじゃが10歳の少年を1人暮らしをさせるのは不安じゃ。じゃから3人部屋で2人暮らしをしておつ2人にネギくんの面倒を見て欲しいのじゃ」

「そういう事ですか。おれは構いませんけど、パルジは？」

そう言つてパルジを見ると、パルジは意外そうな顔をした。

「あの俺達が面倒を見るのですか。彼女達ではなくて」

「…最初はそのつもりじゃったのじゃが、ちと事情が変わってしまったな」

学園長は汗をかきながら半ば誤魔化すようにそう言った。このネ

ギという少年には何か有るのだろうか。

「分かりました。面倒を見ることに問題はありません」

学園長の様子を不審に思いながらもパルジもネギくんの面倒を見ることに同意したのだった。

「では後は寮での生活についての話をするから木乃香とアスナくんは退室してかまわんぞ。ネギくんの案内」苦勞じゃった」

学園長の許可がでて木乃香さんとアスナちゃんは嬉しそうに部屋を出て行った。

「さて、それでは重要な話をしようかの。もう2人は気づいておると思うがネギくんは魔法使いじゃ。魔法学校を卒業して修行の為に日本にやって来た。ネギくんこの2人は魔法使いじゃ。まだ見習いじゃがネギくんの力になってくれるじゃろっ」

「本当ですか。よろしくお願いします、お兄さん」

「ユウでいいよ」

「俺はパルジファル、パルジと読んでくれ」

「僕の事はネギと呼んでください」

俺達がそう言って自己紹介すると学園長が俺達の事をネギに説明した。

「この2人はネギくんに劣らない優秀な生徒じゃぞ。パルジくんは魔法世界で古くから続く名門の出で、優秀なエリートじゃ。対するユウくんは半年前に魔法の事を知りその僅か半年でパルジくんに並ぶほどの技量を身に付けた天才じゃ。この2人から学ぶ事も多いじゃろっ。修行がんばるのじゃぞ」

「はい！頑張って一人前の、魔法使いになります」

それから今後の世活についていくつかの注意を受けた後俺達は生活の場である寮へと向かった。

「あの、お2人に連れて行って欲しい所があるのですが」

寮へ向かう途中ネギはそう言った。俺は携帯電話にメールが入ったので確認していたのでパルジがネギに返事をした。

「行きたい所？」

「はい、それはやっぱり聖地アキバです！」

「なんだって？」

「ですからアキバハラに行きたいんです。萌え系アニメ発祥の国日本。そこに住めるだけでも幸せなのにアキバに近いだなんて天国です。次の休みに連れて行ってください！」

尻尾があればブンブン振っていたであろうネギのはしゃつきぶりにちよっと可哀想だと思いつつ俺はネギにある事実を告げた。

「残念ながらそれは駄目だ。今学園長からメールが来て、ネギは仮採用期間中は学園都市から外に出てはいけないそうだ」

俺がそう言つとネギはこの世の終わりのような顔をした。

「そんな〜。せっかく日本に来たのに！」

「ああ、このせいで俺達が面倒を見ることになったのか」

ネギの落ち込む顔とパルジの達観した顔が対照的だった。そしてこれから俺達はネギを中心とした騒動に巻き込まれる事になるのだが…。まあ、俺にとっては厄介ごととは日常茶飯事なので問題なかったりする。

第2話

side パルジ

俺は自分のことをヘタレだと思っている。マンガの世界に転生して原作知識が有るのにそれを利用せずに原作キャラと呼ばれる人物の接触しようとしなかったからだ。正直に言おう、原作介入する度胸が俺には無かったのだ。

しかしそのお陰で俺は生き延びる事が出来たとも言える。何しろ原作介入を狙ってアスナや木乃香といった少女達に接触しようとした転生者たちは学園長の手によって粛清されたのだから。

学園長：関東魔法協会としては魔法の事を知っている一般人や知るはずの無い事を知っている魔法生徒は危険人物なのだろう。今学園にいる転生者は少数の動かなかった原作知識持ちと多数の知識を持たない者たちだ。きっと彼らの大多数はネギ達と深い関係になる事はないだろう。

一方で俺と同室のユウは原作知識を持たない転生者だ。ユウが転生者なのは木乃香と付き合っている以上、原作に登場しない人物で間違いないからだ。そして原作知識を持っていないと思えるのはこれまで行動で明らかだった。

ユウがこの麻帆良学園に転校してきたのは小学6年の時だった。転校してきたのは親の勤め先の都合で一緒にやってきた『妹』とその友達を見たとき度肝を抜かれた。何しろ『ネギま』とは関係の無い別のアニメの登場人物だったからだ。幸いというべきか彼女達にちよっかいを出しそうな転生者は学園長の手によって粛清された後だったのでユウ達は一般人として学園に溶け込んで行った。

それと同時にユウの力リスマ伝説が始まった。菓総研に入ったユウは作り出すお菓子の上手さからあつという間に有名になり。ユウのケーキは小学校を卒業する頃には学園長の口にまで入るようになっていた。

ユウが木乃香と知り合いになったのはその頃だ。ユウが作ったケーキを食べて作ったのが同じ歳の男の子だと知って興味を持ったのが切欠だった。けれどもユウは木乃香と知り合いに名つても特に何かをするわけでもなく、木乃香を特別扱いする事もなかった。

余裕があれば誰にでもケーキを配り、請われれば誰にでもケーキの作り方を教えた。ある時魔法とは関係の無い原作にも出てこなかった一般の教師が恋人にケーキを作ってあげたいから作り方を教えて欲しいと言われたとき、ユウは親切丁寧にケーキの作り方を教えていた。

そして半年前のあの事件、ユウが図書館島の地下で魔法を知ったあの事件。図書館島の大司書がユウの事を信用置けると太鼓判を押したこともありユウは魔法使いになった。

そしてそれからしばらくしてユウは木乃香と付き合うようになった。しかしそれは普通のお付き合いで学園長が動くことは無かった。

俺はそんなユウの姿を同室だったお陰で近くで見ることが出来た。そして羨ましいと思った。重要人物に関われたことではない、原作知識を持たないが故に自由に行動できることがだ。原作知識、つまり『未来』を知らないから好き勝手に動ける、原作を気にせずに動けることがどれだけ素晴らしいのかを俺は知ってしまったのだ。

…で、そうしてそんな事を今考えているのかと言つと、今まさに原

作イベントに巻き込まれてしまったからだ。ネギの正体がアスナにばれてしまうイベント、それに俺も巻き込まれ魔法使いだとばれてしまった。さらに俺とネギと同室のユウも魔法使いだと芋ずる式にばれてしまった。

どう誤魔化せばいいのか、原作のシーンが頭の中でぐちゃぐちゃと周って上手く考えられない。だからこの場にはいないユウの事を考え、ユウならどうするのかトレースすることにしたのだ。

「あの神楽坂さん、俺の話聞いてほしいのだけど」

「何よ？」

「魔法使いの正体がばれると罰を受けないといけないんだ。当然ユウも正体がばれたから罰を受けることになる」

「それで？」

「その罰っていうのがオコジョ刑といってオコジョにされてしまうものなんだ。もしユウがオコジョになったらもうケーキを作れなくなるんだけど、それは嫌だよな」

「確かに」

「だから、この事は秘密にして欲しいんだ。もし秘密を守ってくれるのなら報酬としてユウが持ち帰ってくるケーキを横流しする事を約束しよう」

「その話、乗ったわー！」

こうして俺はアスナの買収に成功した。そしてネギが尊敬の眼差しで見えてくるのがこそばゆかった。しかしアスナの魔法バレした事をユウに秘密にしたために後々大変な目に合うことになるとは思わなかったのだった。

第3話

side ネギ

ねぎ君へ

次の期末試験で、二 Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。

「う、これが最終課題ですか…。なーんだ簡単そうじゃないですか」

教師生活にもなれ、もうすぐ期末試験という頃僕は正規採用される為の課題を学園長から与えられた。この時は僕は課題の内容を簡単だと楽観していた。でもアスナさんを始めとする5人の成績が…、いや成績が悪い事を楽観視していることが分かって僕は不安になってしまった。そこで僕は魔法に頼ろうとしてアスナさんに起これられました。その事で反省した僕はテストまでの3日間魔法を封じたてただの人として頑張る事にした。

「そうか、そこまでネギは本気なんだな」

そのあと部屋に帰ってアスナさんの事は伏せて魔法を封じた事をユウさんに話すとユウさんはそう言って僕の事を誉めてくれた。けど…

「あの、ユウさんは何をやっているんですか？」

ユウさんは魔法で周りに何冊もの参考書を開いて浮かばせていた。そしてテーブルの上に広げたいくつものノートこれも魔法で浮かせたペンを使って答えを書き込んでいた。

「ん、課題をやっているんだけど」

「魔法を使っているじゃないですか、ズルは駄目ですよ」

どう見てもこれは魔法を使ってズルしているようにしか見えない。

「ところがこれはズルじゃないんだよな。ユウは魔法を使って同時に何冊もの参考書を読み、そして同時に答えを導き出しているんだ。『マルチタスク』という技能らしんだが、普通じゃないよな」

そう思っていると、パルジさんがユウさんのやっている事を説明してくれた。

「この前ユウが学園長と話しているのを聞いただろ。ユウは学力だけなら大学でも通用するって」

「でもズルくないですか？」

僕がそう言うと1つずつ課題をこなしているパルジさんは首をふった。

「その分いつもは交代でしている家事を全部やってくれるんだ。ネギも家事をやらなくていい分時間が出来るんだぞ」

そう言われると魅力的だ。アスナさん達のテスト対策をしないといけないので時間は欲しいのだ。そう思って納得しようとするとうさんは課題を終わらせた。

「さて課題は終わった。次はテスト対策だ」

そう言うとユウさんは紙束を取り出した。

「何ですかそれは？」

「伝を頼って集めた10年前からの過去問だよ。学年末で範囲はほぼ被るからな。よく出る問題やテスト問題の傾向がこれで分かるんだ。他の教科はもうまとめとめてあってこの英語で最後だ」

ユウさんはそう言って過去問のプリントを広げだしました。

「ユウさん！他の教科はもうまとめとめて有るって言っていましたよね。そのノート写さして貰ってもいいですか？」

「ん、いいよ。テスト問題は男子も女子も一緒だからネギの生徒にも役立つはずだ」

ユウさんの許可が貰えたので僕はノートの写しを取った。写し終えるとすぐにアスナさん達の元に届けたくなくなったので外出する事を伝えた。

「ユウさん、パルジさん！僕、女子寮に行つて来ます！」

「言つて来い。英語の分はまとめたら後で持つていく」

そう言われて僕は女子寮へ駆け出した。そして……

「あの、どうして僕達はこんな所にいるんでしょう？」

女子寮の前に着いたら出かけようとしていたアスナさん達に連れられて、僕達は図書館島の中に忍び込んでいた。

「ここに隠されている魔法の本を手に入れるためよ。これを読めば頭がよくなるのよ」

「アスナさん魔法には頼らないんじゃない……」

「ネギ、これも最下位を脱出するためよ」

アスナさんがそう言ったので僕は感激した。アスナさんは僕のた

めに最下位を脱出しようと考えてくれていたのだ。

「だからいざとなったら魔法で守ってね」

「あ、今僕魔法を封印して使えませんよ」

「え、ええー！」

その後魔法が使えないせいで身体強化が使えずにもたもたしている僕をアスナさんが気遣ってくれて僕達は奥まで進み、そして門番のゴーレムの出す試練に失敗して地下に落とされてしまった。

「幻の地底図書室!？」

「はい、図書館島の地下にある幻の図書館。ここに来て生きて帰ってきた者は3人だけだという」

「来た人いるんだ、3人も…」

夕映さんの説明を聞いてアスナさんはそうぼやいた。

「ちなみにその3人のうちの1人はユウくんなんやで」

「え、ユウさんが？」

「そうです、図書探検部でもない人がいとも簡単に、でも今日私はようやくここにたどり付きました。ついに私はあの男に追いついたので
す
す

「生きて帰れたらね」

その言葉がでて落ち込む皆を励ますために僕は声を張り上げた。

「皆さん元気を出してください。きっとすぐに帰れますよ。まずは期末に向けて勉強しましょう」

「いや、その前に説教タイムだ」

そう男の声が聞こえて声のした方を見るとユウさんがいた。それ

もかなり…、いやそつとつ怒っていた。

「ユ、ユウさん。どつしてユウさん？」

「英語の文のノートを届けに来たら女子寮には来ていないと言われて、GPSでネギの居場所を調べてみたらこんな所に……」

そう言えば連絡用にと携帯電話を渡された時GPSがついていて居場所が分かるようになっていて言われていたっけ。

「なあ、お前達はテスト勉強をせずにこんな所で何をやっているんだ？」

「ま、まあユウくんおちついて」

「木乃香さん、いくらあなたでも許せない事も有るんですよ」

「あかん、ユウくんは完全に怒っとるで」

その後僕達はユウさんにえんえんと説教された。その怖さは学年主任の新田先生を上回ったという。そして…

「じゃまな門番のカーゴイルは『排除』したからとつと帰るぞ。あとお前等のテスト勉強は俺も見るとつと」

ユウさんに案内されて朝には地上に出る事ができ、残りの時間ユウさんに扱われたアスナさん達は平均点を上回る事ができた。そのおかげで2 Aは最下位脱出を果たす事ができた。

そして…

「ネギくん課題達成ご苦労じゃったな」

「いえ、ほとんどユウさんの恐慌政治のおかげです」

2 Aが最下位を脱出できたので僕は学園長からねぎらいの言葉

を受けていた。

「いや、ネギ君も一緒に頑張ったと聞くぞ。それにユウくんを動かしたのはネギくんの方じゃろ。結果を出したから課題は合格じゃ。新学期から正式な教師として採用しよう」

学園長は僕に課題の合格を言い渡した。

「ありがとうございます。所で、その顔は大丈夫ですか？」

学園長の顔に殴られたような痣があったので僕は聞いてみた。

「う、うむ後で魔法で治療するから大丈夫じゃ。それよりも正規採用となったから外出の許可を与えよう。保護者同伴の条件じゃがアキバとやらにも行ってもいいぞ」

「本当ですか。ありがとうございます。正規採用になって給料もアツプだからこれでDVDとコミックが買えます」

外出の許可が下りたので僕は大喜びをした。

「う、うむ。(ちと早まったかの……。まあよい、新学期になればエヴァが本格的に動き出すじやろう。今回は中途半端に終わったが次こそは試練を受けてもらうぞい)」

新学期に何が待っているのかも知らず。この時の僕は目先の春休みを楽しみにしていた。

幕間 1

side パルジ

期末テストも無事に終わり春休みに入った。ネギの2 Aは最下位を脱出出来たものの学年1位にはなれなかった。ただこれが原作とは違った展開になったせいなのか、2年の女子の中にいる何人かの転生者のせいなのかは俺には分からなかった。

それでも課題を果たしはネギは無事に2 Aの正式な担任となり、原作通り春休みを利用して家庭訪問を行っていた。そして新学期の前日の今日、ようやく時間が出来たのでネギは念願のアキハバラに行くことになった、…のだが。

「なんでまたこんなにも人数が多いわけ？」

保護者代わりに俺とユウが付いて行く事は確定だった。そこにアスナと木乃香、そしてバカレンジャーとのどかにハルナ…、つまり後方支援をしていた2人を合わせて図書館島に忍びこんだメンツが揃っているのである。

「いや、正式採用のお祝いに俺がおごると言ったらその話が2 Aに洩れてしまって。ネギが正規採用されたのは自分達のおかげだからおごられる権利は有るって、ついてきたんだ」

ユウがそう言うと女性陣の大半ははニヤニヤしていた。これはテスト勉強でさんざんユウに扱かれたことに対する報復のつもりなのかも知れない。

そんなことを考えていると遠くから視線を感じたような気がした。

気になって見てみると木乃香の護衛のせつながこちらを睨んでいた。その表情はお嬢様をアキバなどという変な場所に連れて行くとは何事だと言わんばかりだった。

そんなせつなの殺気を受けているはずのユウは気づかないのか気にしないのかごく普通に皆を引き連れてバスに乗り込むのだった。

そして乗り込んだバスの運転席には高畑先生がいた。

「やあ、聞いていた通りの大所帯だね」

「た、高畑先生！どうしてバスの運転席に？」

「アキバに行くのに急に大所帯になったから学園長が気を回してバスを用意したんだ。それでもバスの免許は持っているからね。（注、オリジナル設定です。でも仕事柄こうゆう免許は持っていそう）運転手兼引率約を仰せ付かったんだ」

高畑先生がそう言う相手は『元』担任だけなことも有って女子達は恐縮したようだった。

「タカミチ、バスの運転も出来るんだ」

まあ、ネギは純粋に喜んでいたが。

その後ネギはアキバに付くとお小遣い（予算）ピー円でDVDとコミックを買い、俺に荷物を持たせてユウと木乃香に手をつながれてランランとアキバをまわった。アキバという事で約1名ホームグラウンドのように先導する者がいて、美少女揃いなのでナンパされかけて高畑先生に追い払われて、庇って貰ったアスナがぼうつとなったりでわいわい騒ぎながらお昼になり…

「えーと、二二で食事をするのか？」

メイド喫茶で食事をすることになった。

「いいじゃない、アキバで食事といったらメイド喫茶よ」

ハルナがそう言い大半が面白がって賛同したので俺達はメイド喫茶の中に入った。もちろんユウの驕りで。

まあ、ユウは年齢に合わないほどの大金を持っているのでこれくらいどおって事は無いのだろう。おそらく『あっち』関連で稼いだはずなので何でそんな大金を持っているのか聞けないが。

そんな事を思いつつ、席に座ると何人ががいなくなっていた。どうしたんだろうと探して見ると、店の置くから木乃香達がメイド姿で出てきてこっちにやって来た。

「ねえねえ、この店ではメイド服をきれるんよ」

「わあ、木乃香さん似合ってますよ」

アスナが高畑先生の元に行くのを除いて着替えた女子達はネギと一緒に座っているユウの元に来て来た。メイド姿でワイワイやっている女子達を眺めていると不意に強烈な殺気を感じた。もしかやと思っで見るとそこには血の涙を流さんばかりのセツナがいた。言いたい事は分かるが俺は見なかった事にした。そして気づかないのかスルーしているのか、平然としているユウが心から羨ましいと思っただ。

そして帰りのバスの中、疲れて眠ってしまったネギを木乃香に膝枕させるとユウは話があると自身に注目させた。

「さて、今回の事でネギについて分かった事がある。それはネギは別

にアニメに女の子が好きというわけでは無いといことだ」

それを言われて皆驚愕した。あれほどアキバでDVDとコミックを買っていたのにどうい事なのだろうか。

「ネギはDVDとコミックのみ勝ってフィギュアやポスターには興味を示さなかった。そしてメイド喫茶でも可愛いとかの感想はあっても別に萌えたりはしなかった」

そう言いながらユウはネギが買ったDVDを取り出した。そのDVDのタイトルは『超絶！魔法少女はやてちゃん』という物だった。このアニメは『魔法少女リリカルなのは』の八神はやてをモデルにしたような少女が主人公でライバルとしてフェイトをモデルにしたような子も出てきた。そして2期にはなのはをモデルにしたような魔法少女も出てきて、さらにアリサ、すずか似の子も出てきた。そもそもメインポンサーがバンニングスグループなので、最初はこの世界における『魔法少女リリカルなのは』だと原作を知る転生者は皆思っていた。だから本物の高町なのは達が麻帆良学園に転校してきた時はかなり驚いた。

ちなみに『超絶！魔法少女はやてちゃん』は絶賛人気中で今4期に入っている。とうとうスカリエッティや戦闘機人の少女達まで出てきたので、あっちの世界は今どうなっているのかと本気で不安になっていたりする。

俺はDVDについて説明（誰に？）しているとユウは話を続けた。

「ネギは可愛い女の子が好きなんではなくて、ただ純粹にかっこよく活躍するヒーローも求めていたんだ」

ユウがそう言つとバスの中に2度目の衝撃が走った。

「でもそれなら男の子向けのヒーローがいっぱいいる筈です」

夕映がそう言つと、ユウは首を振りながら言葉を続けた。

「皆知らないから言つけど、ネギにとって行く不明の父親以上にかっこいいヒーローはいないんだ。だから男性ではなく女性のヒーローを求めるようになってしまったんだ。萌えアニメが好きだと言うのはまわりにその事に気づく人がいなくて誤解され、ネギ自身もその言い回しを使うようになってしまったのが原因だと俺は思う」

ユウがそう言つとバスの中は沈黙に包まれた。いや運転席から高畑先生のすすり泣く声が聞こえる。危ないのでちゃんと運転してください。

「と言つ訳でネギの趣味はほつとしても問題ないという事で暖かく見守るとしよう。だから現実の女子に興味を持たせるとか言つて変なことはしないように」

ユウがそう言つと何人かの女子は気まずそうに目をそらした。

そして俺達は麻帆良学園に降りついたのだった。

「それにしてもユウくんはネギ君のお父さんみたいやな」

疲れて眠っているネギを背負つユウを見て木乃香はそう言った。

「俺はまだこんなにも大きな子供は欲しくない。でも『弟』だったらいいな」

そう言つてユウは寮に向かって歩いて行った。荷物を俺に持たせ

て…

そして1日が過ぎ新学期が始まった。が、佐々木まき絵俺達と行動を共にしたことでエヴァに教われず、別の女性が襲われた事で、桜通りの吸血事件は大きく変わる事になるのだった。

第1話

side ユウ

アキバハラにいった日の夜、俺とパルジは学園長に呼び出された。

「桜通りの吸血鬼？」

「そうじゃ、2人とも噂ぐらいは聞いたことがあるじゃろう。実はその吸血鬼の正体は魔法関係者で、その噂の解決をネギ君の修行の1つにしようと考えておるのじゃ」

「はあ…」

それだけなら俺達を呼び出す必要は無いはずである。呼び出した用件はここから先だと思いき身構えると学園長は本題を告げた。

「それで今回の一件に関してパルジ君とユウ君は直接的なネギ君の手助けをしてはならぬ。よいな」

「一応確認しておきますけど、危険は無いんですね」

「魔法の修行の一環じゃ危険が無いといえば嘘になる。じゃが命の危険が無い事は約束しよう」

学園長がそう太鼓判を押したので俺は学園長の言葉に従うことにした。

「分かりました、でも『身内』が被害に合わない様に『身内』の送り迎えはさせてもらいますよ」

「まあいいじゃろう、もっともユウ君の関係者は襲わぬと思っがな」

学園長は意味深な事を言って俺が『身内』の護衛をする事を許可してくれた。そしてネギ宛に課題と書かれた手紙を持って学園長室を

後にした。

そして翌日、放課後俺は1人の少女に呼び出された。呼び出した少女の名前はアリサ・バニングス。俺の『妹』である高町なのはの親友の1人で俺達と一緒にこの麻帆良学園に転校してきた仲だった。

「ユウさん、桜通りの吸血鬼って知ってる？」

アリサちゃんは俺に向かってそう聞いてきた。アリサちゃんには『この』魔法については秘密なので俺は真相を知らないふりをしながら返事をした。

「吸血鬼は見たこと無いけど、話はよく聞くよ」

「ならユウさんが退治して。今朝、私のクラスメイトが桜通りで倒れているのが見つかって、吸血鬼の仕業だって噂になってさすがが気にしているのよ」

すずかちゃんはなのはちゃんとアリサちゃんの幼馴染で『夜の一族』という吸血鬼の一族の出だ。吸血鬼の被害者が身近に出たとなれば心穏やかではないのだろう。

だからとアリサちゃんが俺の所に来たというわけだ。しかしこの件は俺は手出し出来ない。その事も言えないので言える事だけ言ってアリサちゃんを安心させる事にした。

「大丈夫、俺が動くまでも無く学園長が手を打つそうだから。あと事件解決アリサちゃん達の送り迎えをしようかと思っていたんだ」

「どうして学園長が手を打った事を知っているのよ。…ああ、先輩がらみか」

アリサちゃんは俺に質問をして、しかし自分で答えを出して納得し

た。なのはちゃんは俺と同じ菓総研、すずかちゃんはロボット工学研究会(大学のサークルだが特別に参加)、そしてアリサちゃんは中学生になったので図書館探検部にはいる事になっている。だから木乃香さんの事は先輩と呼んでいるのである。

「そう言えばユウさんは本当は先輩の事をどう思っているわけ？なのはに対するユウさんの態度見てきた者としては先輩と本気で付き合っているようには見えないんだけど」

吸血鬼の件については納得したのかアリサちゃんはそんな事を聞いてきた。

「俺は真面目に付き合っているつもりだけど。まあ、粘着質とか言われたくないからいろいろと考えてはいるけど」

「それが本気に見えない理由だけど……まあいいわ。これから部に行くけど帰りはちゃんとガードしてよね」

そう言うだけ言うとアリサちゃんは図書館島に向かって行った。それから俺も菓総研に行き部活をして、なのはちゃんとすずかちゃんを先に(なのはちゃんは木乃香さんと一緒にいるのを嫌がるので)女子寮まで送り届けた。

そして俺は図書館島に行き、アリサちゃんとだけ一緒に寮に向かった。

「何よ、先輩ったら『彼氏』が迎えに来るのに友達と一緒に帰るだなんて」

「まあ、迎えに行くって言っていなかったからね」

俺が来る前に木乃香さんは迎えに来たアスナちゃんと一緒に帰ってしまっていた。それがアリサちゃんには納得いかないのだろう。

そんな事を言いながら歩いていると桜通りの方から悲鳴が聞こえた。

「出たわね吸血鬼！」

それを聞いてアリサちゃんは走り出してしまった。課題の手紙は朝ネギに渡したのでおそらく悲鳴の先にはネギもいるのだろう。ネギを助ける事は出来ないが『身内』の護衛は許可されているのでアリサちゃんを守るためという名目で俺は現場に向かった。

「ああ、ユウくんいい所に。あ、でも見たらあかん」

俺達が現場につくと、木乃香さんが何故か裸ののどかちゃんを抱きかかえてあたふたしていた。俺は上着をアリサちゃんに渡してのどかちゃんにかけさせると極力のどかちゃんを見ないようにしてのどかちゃんをおぶった。

「何があった聞きたいけど、こんな姿ののどかちゃんを一目にさらす訳にはいかない。まずは女子寮にのどかちゃんを運ぼう」

そう言いつつも俺はのどかちゃんから僅かに魔法の力が残っている事を感じてた。おそらく武装解除の魔法が当たったのだろう。後で学園長に連絡を入れてのどかちゃんの制服の変わりを用意して貰う事にした。これはネギ1人に任せた学園長の責任なので、学園長が女子中学生の制服を手配するに当たってどう思われようが知ったことではない。

それから無事に女子寮に着きばれない様にのどかちゃんを部屋に運ぶと俺は早々に女子寮を出た。そしてネギの様子を知るためにGPSを使ってネギの後を追った。

その途中で俺は出合ってしまった。下着姿で闊歩する金髪少女と

…

「キ、キティちゃん、そんな格好で何をやっているの…」

「ゲ、ユウさん」

エヴァンジェリン・A（アタナシア）・K（キティ）・マクダウエル、菓総研と深いつながりがある茶道部の部員だ。俺が和菓子を学び始めた時いろいろアドバイスをくれた恩人であり。また歳の割りに発育が悪いのを心配してよくお菓子をあげていたりもしている妹のような（同じ学年だけど）子である。

そのキティちゃんが…、礼儀ただしくてお菓子を貰っては喜んでくれたキティちゃんが下着姿で堂々と外を歩いていたのである。

「キティちゃん、まさか露出狂…」

あまりの出来事に混乱する中、俺は知り合いの露出狂の事を思い出さずそう思った。

「いや、違う…」

「いいんだよ、否定しなくても。趣味は人それぞれだから。うん、この事は誰にも言わないから。じゃあ俺はこれで」

俺は早口にそう言つとこの場から走り去った。GPSを見るとネギはもう寮に戻ったので俺も寮に帰る事にした。そして俺とネギは無言のまま、不思議に思うパルジに後を任せて俺はベッドの中に潜り込んだ。

第2話

side パルジ

原作通りネギはエヴァと茶々丸コンビにボロ負けしたようだ。アスナに連れられて泣きながら帰ってきたネギを休ませると俺は今後のスケジュールを思い浮かべた。

学校でのイベントは俺が関わる事は無いだろうが問題はカモだ。オコジョ妖精のアルベル・カモミール。あいつが下着ドロを起こして戦利品の下着を俺達の部屋に持って来たら巻き添えをくってしまふ。だから『そこ』だけ干渉して後は傍観するつもりだった。今の時点では。

「熱があるんです休ませてください」

「そうか、じゃあ仕方が無いな」

翌朝、ネギの仮病をユウは信じてネギを休ませようとした。普段ならこんな仮病に引つかからないはずなのに昨夜何かあったのだろうか。仕方が無いのでアスナの変わりに布団をめくり無理やり着替えさせてネギを担いだ。

「おはよう。ああ、やっぱりネギのやつ登校拒否なのね」

「神楽坂さん、迎えに来てくれたの？」

「ええ、昨夜の様子を見るとね」

アスナがネギを迎えに来た以上、後は原作通りに進めるのがいいのだろう。アスナにネギを引き渡すとネギはアスナに担がれて学校に行くのだった。

それから俺は郵便受けをチェックしてネギ宛のエアメールを見つけると、カモに処分される前に鞆に入れた。あとは放課後すぐ部屋に戻りカモを待ち伏せすれば巻き添えはくもらわない…はずだった。

「パルジ、これから下着ドロ狩りを行う。手を貸せ」

学校から部屋に戻りカモを待ち伏せしているとユウに呼び出された。どうやら原作通りカモは下着ドロを働いたようだ。だが中等部の女子寮を荒らしたためにユウを怒らせてしまったらしい。

恋人である木乃香や『妹』のなのはが被害に遭ったのでこの反応は当然だった。

「ユウ、少し落ち着いて。それに狩りって」

「下着ドロを見つけない。必ず見つけ出して捕まえるんだ。だから狩りだ」

ユウは完全に切れていた。これで部屋に戻った時カモが盗んだ下着を持ち込んでいたら先に部屋に戻っていた俺が疑われてしまう。だから俺はユウのエアメールを差し出した。

「パルジ、他人宛の手紙を盗るのは感心しないな」

ユウは一言そう言つとGPSを出した。そしてネギが部屋に戻っているのを見ると寮に向かって歩いて行った。そして部屋でカモを抱えたネギと部屋に上がりこんでいたアスナと積まれた下着を見るとネギからカモを取り上げた。

「お前が下着ドロか」

カモを捕獲したユウは静かにそう言った。ユウとの付き合いは2

年以上になるが、ここまで冷酷なユウの声は初めて聞く。

「ひいひいーい、命だけはお助けを！」

そしてユウにつかまれたカモはガタガタを震えて命乞いをした。正直に言うと俺はこのままユウがカモを殺してしまうのでは無いかと思ってしまう。それほどまでに今のユウは恐ろしい。なにしろあのアスナがネギと抱き合ってブルブルと震えているのだ。

このままカモがいなくなると将来ネギの戦力はガタ落ちする。だからなんとしてもユウは止めなければいけない。しかしこの時は動く事が出来なかった。そしてこのままカモが処刑されそうになった時、ネギが動いた。

「ま、待ってください。ユウさん」

「ネギか、どうした」

ユウに睨まれたネギは体を震わせた。それでも勇気を振り絞り前に出た。

「カモくんは僕をたよってきたんです。だから僕はカモくんを守ります。カモくんを放してください」

ユウは勇気を振り絞ったネギをしばらく凝視すると息を吐いた。すると今までユウの体から出ていた威圧感無くなった。

「いいだろう。その勇気に免じて話だけは聞こう」

そして始まったカモの身の上話。寒いウェールズでの貧乏暮らし。家族である妹に暖かい寢床を作ろうと行った下着ドロ。その話を聞いてユウは…泣いていた。

「そうか、妹の為に手を汚して追われる身になったのか」

どうやら妹の為にが琴線に触れたらしい。そう言えばユウはシスコンだった。

「よし分かった。カモがネギに雇われる事を認めよう。それと妹もこっちに呼びなさい」

「え」

「兄妹なら一緒に住むべきだろう。それに日本は暖かい、こっちの方が快適に暮らせるはずだ」

「本当ですか、ありがとございませう。これからは旦那と呼ばせてください」

受け入れて貰えるとあっさりとかモは態度を翻した。ユウはそんなカモを苦笑しながら見つっ、しかし釘を刺すのを忘れなかった。

「でもな、今度やったら公開処刑だぞ」

その時だけ恐怖を呼び起こす威圧感を出したのでカモは人形のように首を縦に振るのだった。それから盗まれた下着の返却をアスナに任せて俺達は思い思いの事をした。

そして次の日…

「ユウさん、パルジさん。僕は決心しました。昨日のユウさんに比べたら吸血鬼なんて怖くないです。だから今から決闘を申し込みに行ってきます」

ネギはイベントを２、３とばそうとしていた。

第3話

side ネギ

カモくんが僕の使い魔になった翌日、僕はエヴァンジェリンさんに決闘を申し込もうとした。でもその事をパルジさんに話したら決闘を申し込みに行く事を止められた。

「ちょっと待て、ネギ。決闘を申し込むのは構わないが勝算は有るのか？」

そう言われて僕は茶々丸さんを相手に手も足も出なかった事を思い出した。

「ごめんなさい、無いです」

「そうだろ、時間は有るんだ戦つからには勝つための準備をしないと」

パルジさんにそう言われて僕はエヴァンジェリンさんに決闘を申し込むことを一時中断した。

「でも、準備って何をすればいいんですか」

「そうだな、仲間を増やすとか装備を整えるとかいろいろと有るんじゃないか。それにせっかくカモが使い魔になったんだ、一緒に作戦をたてるといい」

パルジさん（）とユウさん（）は学園長から手出し禁止を言い渡されていたのでこの助言が精一杯だと言った。そんな事を話しているとユウさんが話しに加わってきた。

「カモで思い出したんだが、ネギちょっと聞きたいことが有るけどいい

いか？」

「何ですかユウさん？」

「昨日は頭に血が上って気がつかなかったけど、カモがしゃべっていた時アスナちゃんもいたよな。なのにアスナちゃんはカモがしゃべった事を驚かなかった。もしかしてアスナちゃんに魔法の事を話したのか？」

ユウさんに聞かれて僕とパルジさんはピシリと固まった。僕達から返事を聞けそうに無いと思ったユウさんはカモくんに質問をした。僕はカモくんに話さないでとアイコンタクトを送ったけれども、カモくんには届かなかった。

「カモ、お前は何か知っているか？」

「旦那、アスナの姉さんは魔法の事を知っていましたぜ」

僕の願いもむなしく、カモくんはユウさんにあっさりと話してしまったのだ。

「そうか、知っているのか。まあいいけど」

「え、いいの？」

怒られると思っていたのに流されたので僕は拍子抜けした。

「パルジには可哀想だけどアスナちゃんをパートナーにしたんだろ。まだ早いと思って言わなかったけど学園長からパートナーは例外だと言われているんだ」

そう教えられて僕は自分がだらだと汗をかいている事に気づいた。もしアスナさんがパートナーでは無いとばれたらどうなるのだろ…

「なあユウ、そこでどうして俺が可哀想になるんだ？」

僕が困っているだとパルジさんが矛先を変えようとしてユウさんに話かけてきました。

「え、だってパルジはアスナちゃんの事好きじゃなかったのか？」

「ええーそうだったんですか！」

ユウさんがパルジさんがアスナさんの事を好きだと言ったので僕は思わず叫んでしまった。

「ちょっと待て、違う。どうしてそんな考えにいたったんだ！」

でもパルジさんはその事を思いっきり否定しました。

「いや、俺のケーキをアスナちゃんに貢いでいただろ。てっきりアスナちゃんの気を引くためだと…」

どつやらユウさんはパルジさんがアスナさんにケーキを横流ししていたことに気づいていたみたいです。

「ユウさん、横流しに気づいていたんだ」

「横流し？」

「ばかー！」

「あ」

その事を思わず呟いてしまい、その事をユウさんに聞かれてしまいました。

「パルジ、横流しってどついつことかな？まさか俺のケーキを私利私欲の為に使った訳じゃ無いよな？」

昨日の気迫を再び復活させてユウさんはパルジさんに詰め寄りました。そして僕の方を振り返らずにユウさんは僕に話しかけてきました。

「ネギ、先に部屋を出て学校に行け。俺はパルジと話があるから」「はい！分かりました」

僕はユウさんに言われて急いで部屋を出ました。パルジさんがアスナさんの魔法ばれを上手く誤魔化してくれる事を祈りつつ学校に向かうのでした。

…そして放課後、校舎の屋上で。

「ええー！ユウさんに魔法がばれた事がばれたの！」

僕はアスナさんに今朝の出来事を話しました。

「じゃあ、もうケーキは貰えないわね」

「アスナさん、もっと他の事を心配してくださいー！」

アスナさんがボケたので僕は思わずそうつつこんでしまった。

「このままだと僕はオコジヨで強制送還。アスナさんだって記憶を消されてしまっんですよ」

「大丈夫ですぜ兄貴。おれっちにいい考えがありますぜ」

本当に困っているとカモくんがいい考えがあると言って来た。

「兄貴と姉さんが仮契約すればいいんすよ」

「仮契約？」

「仮契約とはパートナーのお試しのようなものです。旦那に兄貴が姉さんと仮契約したといえれば何の心配もなくなりますぜ」

アスナさんの疑問にカモくんは自身を持ってそう答えた。

「要するにお試し期間中だって誤魔化すのね。本決まりで無いならなってあげてもいいわよ」

「本当ですか！アスナさん、ありがとうございます」

「では早速魔法陣を出しますぜ」

アスナさんが仮契約をしてくれる事になったのでカモくんは仮契約のための魔法陣を出した。

「じゃあ、姉さんは兄貴にチューしてください」

「チュー!？」

「あれ、姉さんもしかして初キッスを済ませてないとか？」

「そ、そんなこと無いわよ。それにネギはまだ子供なんだし気にもしないわよ。ほらネギ目をつむりなさい」

アスナさんに言われて僕は目を瞑った。それからおでこに軟らかい感触がして…

「ああ、おでこはちょっと中途半端な」

「別にいいでしょー」

アスナさんは僕のおでこにチューをして僕達は中途半端に仮契約を交わすことになった。そして…

「お前達、場所を考えろ」

仮契約の魔法陣が消えて光が収まるといきなりユウさんが現れま

した。

「ユウさん」

「ひょっとして見てました」

「見てたよ。学園長に用事が有ったから近くまで来たら魔力を感じて……。カモが使い魔になったから仮契約するかもしれないとは思っていたけど、何もこんな所で……。これを見てもみる」

そう言つとユウさんは階段へと続く扉を開けました。するとそこにはクラスの皆が倒れていました。

「わわ！大変です皆さんが倒れて……」

「お前達の仮契約を覗いていたから眠らせたんだ。あとアスナちゃんがネギにチユーしようとしていた光景も不味いと思ったから『封印』した。こういふ事をするのなら認識障害はかけておけ」

ユウさんはそう言つと眠っている皆さんの上半身を起こして壁に持たれかけさせました。

「ネギ、魔法使いは半ばヤクザな仕事だ。パートナーには自分の背負う厄介ごとを半分背負わせることになる。背負わせる覚悟と背負う覚悟、ちゃんと出来ているのか？」

ユウさんに言われて僕は自分が恥ずかしくなりました。なにしろ僕は自分の失敗を誤魔化すために仮契約をしようとしていたからです。

「あとそれと学園長からの伝言。クラスの者なら1人くらいは協力者として魔法の事を教えても問題ないそつだ。よかったなネギ」

ユウさんはそれだけ言つと屋上から立ち去りました。

「ユウさん最初から全部分かっていたんじゃない」

「さあ、でも木乃香の彼氏をやる人だからね」

階段を下りていくユウさんの背中を見ながら僕達はそんな話を話していました。

第4話

side ネギ

アスナさんとの仮契約は中途半端に終わったものの、アスナさんの魔法ばれについては咎められないことを知ってほっとした僕は再びエヴァンジェリンさんの件をどうするのかで悩んだ。

そこでカモくんが戦力力増やせないなら相手の戦力を減らせばいいと言いだして、茶々丸さんが1人になったときを狙って茶々丸さんを行動不能にすればいいと言って来た。

最初は躊躇したものの、その助言にしたがって茶々丸さんの後を付回し（茶々丸さんがいい人なので攻撃するのを躊躇っただけでも、カモくんに言われて攻撃する事にした）ようやく1人になった所で茶々丸さんに向かって魔法の射手を放った。

カモくんの助言に従い。隠れてこっそりと撃った魔法の射手は茶々丸さんに命中するかのように見えた。でも茶々丸さんに当たる直前で僕は思いなおして魔法の射手を自分の方に戻した。そして僕に魔法の射手が命中してポロポロになった所でユウさんが現れて思いつき怒られた。

「ネギ、自分のしたことが何なのか分かっているのか？」

途中で思いなおして茶々丸さんは無傷なのにユウさんがここまで怒ることを理不尽だと思っていたら、考えが顔に出ていたみたいでもっと怒られた。

「どっやら全然分かっていないみたいだな。いくら魔法関係者とはい

え茶々丸ちゃんはネギ、お前の生徒なんだぞ。その生徒を傷つけたら暴力教師で一発アウトだ。もし茶々丸ちゃんがこの事を学園長に話したら未遂でもただじゃ済まないんだぞー」

「大丈夫です。私は所詮機械ですし、傷つけられても罪にはなりません」

「機械だろうと何だろうとネギの生徒である事には変わらない」

この時になって僕は教師として怒られている事にようやく気づきました。

「だいたいネギは教師としてのミスが多い。図書館島の時も先生なら止めないといけないのに流されて付いて行ってしまった。桜通りの時ものどかちゃんを守れなかっただろ。武装解除とはいえ守るべき生徒に魔法を当てさせてしまったのは教師としても魔法使いとしても失格だ。そして今回後先考えずに茶々丸ちゃんを攻撃した。ネギは考えが足らなさ過ぎる」

ユウさんの言っている事は正しい。でも随分と前の事も含めて叱られる事に感情が追いつかなかった僕は大声で叫んだ。

「ユウさんのバカー！そんなに僕の面倒を見るのが面倒なら出っぺるー！」

僕は今まで溜め込んでいた感情を爆発させると、カモ君を置き去りにして一人で僕はがむしゃらに走り出した。そして気がつくところか知らない場所にいた。

いや、今自分が何処にいるのか分かっていても、あれだけの事を言った後なので僕は帰るに帰れなかった。

「ねえ君、大丈夫？」

どうすればいいのか分からなくてさ迷っていると、知らないお姉さんが声をかけてきた。お姉さんといっても僕よりも歳が上なだけでたぶんアスナさんよりも年下だろう。だぶん一年生か二年生……。白いヘアバンドを頭につけた綺麗な人だった。

「そうなんだ、お兄さんとケンカしちゃったの」

お姉さんに声をかけられた後僕は思わず泣いてしまった。そして気がついたらお姉さんと並んで座ってユウさんに叱られた話を話していた。もちろん魔法の事は内緒にしていたけど。

「ねえ、私の友達の話をしてもいい？」

お姉さんは僕の話の聞くとある女の子と男の子の話をしてくれた。

「昔ね1人の女の子がいたの。その子は小さい時にお父さんが大怪我をしてそれが原因で家族から構って貰えなかった時期があるの。それで1人で外に出て、いろいろあって外が怖くなってしまったの。その時になって女の子の家族はこのままじゃいけないと思ったのよね。でもまだお父さんは入院中で女の子の面倒を見てあげる事が出来ない。だから女の子のお母さんは自分のお兄さんに相談してお兄さんの家庭に女の子を預けることにしたの」

そこまでの話はあまり珍しくない。僕も小さいときは叔父さんの残してくれた家で暮らしていた。

「それで女の子は伯父さんの家に預けられる事になったんだけど、伯父さんには女の子よりも少し年上の男の子の子供がいたの」

そついつのつって、やっぱり虐められたりしていたのかな……

「その男の子はもの凄く面倒見がよくて幼い女の子の面倒をよくみてたの。女の子は構って貰って嬉しかったけど、わがママを言うと思われるかもしれないと思ってあまりわがママを言わなかったの。そんなある日、男の子は女の子に『こう言ったそつよ。』この先怒ったりケンカしたりするかもしれない。でも嫌いになったりはしない。だから俺を信じて』って」

お姉さんが言った言葉を僕はよく考えてみた。

「君もお兄さんとよく話をしたほうがいいよ。君を叱ったお兄さんはきつと君の事を思ってる事だと思っつから」

お姉さんは僕にユウさんと仲直りさせようとしてくれているようだ。

「ありがとうございます。寮に帰ってあやまってきます」

「うん、それがいいよ。あ、男子寮はこの道を行けばいいからね」

お姉さんが道を教えてくれたので僕は走りだした。

「それともう一ついい事を教えてあげるね」

「何ですか？」

お姉さんと少し離れて、でもまだ声が聞こえる距離で。お姉さんは僕にもう一つあることを教えてくれた。

「ちっきの話の男の子の名前は『高町ユウ』っていうのよ。がんばってねネギ先生」

「え？」

ユウさんの名前がでて驚いていると、そのユウさんが僕を探してやってきました。

「ここにいたのか、探したぞ」

「ユウさん、あのユウさんの知り合いのお姉さんにお世話になっていました」

そう言ってお姉さんのいた方を見た。けれどもお姉さんはもういなかった。

「すまないネギ。さっきは言い過ぎた」

「僕のほうこそひどい事を言ってしまったってごめんなさい」

お姉さんの姿が見えなくて啞然としているとユウさんがさっきの事を僕に謝ってきた。僕も謝ると決めていたのでユウさんに謝った。

「じゃあ帰るか」

「はい……」

お互いに謝った後、僕達は並んで帰路についた。

第5話

side ネギ

「ユウさんとケンカして仲直りをした翌日僕はある決意をした。」

「パルジさん僕は決めました。魔法少女の理論に従ってエヴァンジェリンさんを仲間にします…!」

「は、何だつて?」

ユウさんが朝の部活の活動でいない時を見計らって僕はパルジさんに決意表明をした。ちなみに何故パルジさんだけなのかというと、エヴァンジェリンさんからユウさんに正体をばらしたら殺すと脅されているからです。

「だからエヴァンジェリンさんを仲間にするんです。今日の分の『超絶!魔法少女はやてちゃん』を見て思い出したんです。強敵とは戦った後分かり合って仲間にすればいいのだと。だから僕はこれからエヴァンジェリンさんを仲間にします…!」

「そ、そうか。でもその前に学校へ行って先生の仕事をするんだぞ」

パルジさんが応援してくれたので僕は意気揚々と学校へ向かいました。エヴァンジェリンさんは相変わらず授業をサポートしていて教室にはいませんでした。とりあえず先生の仕事を休みの間にエヴァンジェリンさんを探しに屋上に行きました。するとエヴァンジェリンさんは屋上で寝ていて、うなされていたのです。

「違うんだユウさん、私は露出狂じゃない…」

うなされながらユウさんの名前を呼ぶエヴァンジェリンさんを見

て僕は疑問を感じた。最初の夜、エヴァンジェリンさんはユウさんに正体をばらしたら殺すと僕を脅しました。その時一緒にいたアスナさんはエヴァンジェリンさんはユウさんの前で猫を被っていると言っていた事を思い出したのです。だから僕はつい出来心でエヴァンジェリンさんの夢を除いてしまいました…

エヴァンジェリンさんの夢の中の最初の場面は茶室と呼ばれる場所でした。そこでエヴァンジェリンさんは正座をしてお茶を飲んでいました。きっとこれはエヴァンジェリンさんが所属している茶道部の光景なのでしょう。そのまま時間がたち今日の活動が終わろうとしていた時、茶道部に来客がありました。やってきたのは中学生のお姉さんに連れられた今よりも幼い小学生のユウさんでした。

「こんにちは、最近転校で麻帆良学園にやって来てウチのクラブに入った有望な新人を紹介するわ」

「はじめまして、高町ユウです。得意分野は洋菓子ですが和菓子も学びたいと思っています。よろしければ食べていただいて感想とかをもらえれば嬉しいです」

お姉さんに紹介されてユウさんは自己紹介をしました。そしてお近づきの印にと自分が作ったケーキを差し出しました。

「う、上手い。これだけの物を食べたのは今までの人生で数えるほどだぞー」

その中でユウさんのケーキを食べたエヴァンジェリンさんは大声をあげて言いました。

「まあ、味にうるさいエヴァンジェリンさんがそんな高評価を。凄いわね」

エヴァンジェリンさんの評価に茶道部の人はそう言いました。それからエヴァンジェリンさんはユウさんの作った和菓子の評価や改善点などをユウさんにする関係になりました。

そして月日は流れ、ユウさんは小学校を卒業して中学生になる時がきました。最後の部活の日、ユウさんはエヴァンジェリンさんと話をしました。

「俺が卒業するようにエヴァ先輩も中学を卒業ですよね」

「ああ、そうだな」

「茶道部は中高で別々になります。中学生の間は高校には顔を出せないのは知っていますよね」

「ああ」

「でも俺としてはエヴァ先輩の評価はこれからも続けて欲しいんです。お願いできますか？」

するとエヴァンジェリンさんは何を思ったのかこんな事を言いました。

「条件がある。次に会う時まで私の名前をフルネームで覚えていろ。そうしたらこれまで通り評価をしてやる。1回しか言わないからちゃんと覚えるのだぞ。私の名前はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルだちゃんと覚えるのだぞ」

「分かりました、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルですね。ちゃんと覚えます」

そう約束してユウさんは帰って行きました。ユウさんを見送ったと1人になったエヴァンジェリンさんは悲しげに呟きました。

「何をやっているんだ私は。呪いの所為で覚えておけるはずは無いのにな……」

エヴァンジェリンさんの眩きの意味はその時は分かりませんでした。でも夢の続きを見てその理由が分かりました。新学期が始まるとエヴァンジェリンさんは中学1年からやり直しになったのです。卒業式に貰った卒業証書は灰になり、誰もエヴァンジェリンさんが中1からやり直している事に疑問を持ちません。

茶道部の人たちも今まで先輩と呼んで慕っていたのに新入部員として年下扱いしています。これがエヴァンジェリンさんにかげられた呪い登校地獄の本当の辛さなのだと僕は知りました。エヴァンジェリンさんはこの地獄を何度も繰り返していたのです。

それから数日が過ぎて茶道部にユウさんがやってきました。ユウさんも登校地獄の呪いの所為でエヴァンジェリンさんの事は覚えていませんでした。だからエヴァンジェリンさんの事も新入部員として紹介されました。でもここで奇跡が起きました。

「キティちゃん？」

「何？」

「あ、ごめんね。エヴァちゃんの顔を見たら急にそんな名前が頭に浮かんで」

ユウさんがそう言つとエヴァンジェリンさんは俯いて泣きそうになりました。ユウさんはエヴァンジェリンさんの事は覚えていなくても約束の事は覚えていたのです。

「私の名前はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルだ。だかたキティは私の名前であっている。本当はこの名前で呼ばれるのは好きでは無いが特別に呼ばせてやる」

エヴァンジェリンさんは何とか泣くのを堪えると胸を張ってそう

言いました。

「うん、わかったよ。よろしくねキティちゃん」

一方でユウさんは最初は驚いたものの落ち着きを取り戻してエヴァンジェリンさんの頭を撫でながらそう言いました。以前はエヴァンジェリンさんの事を年上として敬っていましたが、どうやら今は完全に子供扱いのようです。でもエヴァンジェリンさんは何処と無く嬉しそうでした。

それからユウさんはエヴァンジェリンさんの事を妹のように可愛がり、エヴァンジェリンさんもだんだん偉ぶらずに可愛くなってきました。でもユウさんが2年生になってエヴァンジェリンさんの苦しみが始まりました。

ユウさんが夏休みの間に魔法を知って魔法使いになったからです。それはつまりエヴァンジェリンさんの正体を知ってしまう可能性が出てくる事になります。

慌てたエヴァンジェリンさんは学園長に言って自分の正体を知れないようにしました。すると今度はユウさんが木乃香さんと付き合うようになりました。

「ふん、お菓子を貢がせる為に可愛く演じてやっただけだ。それ以上は何も期待していない。だから彼女が出来ようとも知ったことか」

そう言いながらエヴァンジェリンさんは荒れていました。そしてまた時は過ぎ、僕が麻帆良学園にやってくる事をエヴァンジェリンさんは知りました。それからエヴァンジェリンさんは僕と戦うためにこっそりと吸血行動を行い、それは桜通りの吸血鬼として噂になって行きました。

そしてあの夜、僕と別れたエヴァンジェリンさんは僕を探していたユウさんと鉢合わせてしまいました。下着姿のままです…

「キティちゃん、まさか露出狂……」

「いや、違う……」

「いいんだよ、否定しなくても。趣味は人それぞれだから。うん、この事は誰にも言わないから。じゃあ俺はこれで」

エヴァンジェリンさんの姿を見てユウさんは驚き、早口で言うように去って行きました。

「おのれ！ネギ・スプリングフィールド。親子二代に渡ってロクデモナイ事をしてくれたな！」

怒髪天で暴れるエヴァンジェリンさんを見て僕は正直にごめんなさいと思いました。

第6話

side パルジ

エヴァンジェリンを仲間にする朝出て行ったネギは意気消沈して夕方に帰ってきた。

「ネギ、駄目だったのか？」

「いいえ、今度の停電の日に決着を付けて僕が勝ったら仲間になってくれる事になりました。…負けたら血を吸われますけど」

少しタイムスケジュールが違うが概ね原作通りの展開だ。一体何に対して落ち込んでいるのだろうか？そう思って聞いてみるとネギはポツリポツリと話してくれた。

「最初エヴァンジェリンさんに話をしようと思えば屋上に行くと、エヴァンジェリンさんは昼寝をしていたんです。僕はエヴァンジェリンさんの寝言が気になって思わずエヴァンジェリンさんの夢を覗いてしまったんです。夢の内容は口止めされているので言えませんが、夢を見られた事に気づいたエヴァンジェリンさんを怒らせてしまったんです」

まあ、これも原作に有った事だな。

「そこでエヴァンジェリンさんは僕の父さんの事を口にしました。エヴァンジェリンさん曰く父さんはかなり…、いえ相当正確が悪かったと。そしてその証拠に父さんがエヴァンジェリンさんの記憶を見せられたんです」

そこまでいうとネギは乾いた笑みを浮かべた。

「ねえ、パルジさん。魔法使いって何なんでしょう。タカミチですらデスメガネと言われて一部の生徒の皆さんから恐れられていたんですよ」

これはかなり不味い展開だ。このまま放って置くとネギは魔法使いをやめてしまうかも知れない。仕方が無いので俺はネギに有る事を教えることにした。

「ネギ、確かにお前の父さんはアレな所が有ると噂で聞いたことが有るがそれでも多くの人々の為に活躍したんだぞ。修学旅行で今度行く予定の京都でも危険な魔物（鬼神）を封印したり、魔法使い同士の戦争を止めたりしたんだ」

そう言うとネギの顔はパアツと明るくなった。素直で単純なものである。

「所で停電の日に決着をつけると言っていたけど、勝算は有るのか？」

原作通りなら問題は無いけど、何か雲行きが怪しくなってきたので聞いてみた。そうしたらネギはエヴァンジェリンと茶々丸の2人と戦わなければならない事を思いだして…落ち込んだ。

「特訓するか？」

「はい、お願いします」

こうして停電前の連休の日に特訓をすることにした。…もちろん山で。上手くいけば潰れそうな楓のイベントを起こせるかもしれないと期待して。

そして当日、

「学園長に訳を話してキャンプにいるものを借りてきたぞ」

俺とネギとユウは3人で楓がいる（と思われる）山に来た。ちなみにアスナは修行の事は知っているが参加はしなかった。ネギの事は心配でも男3人に混ざってキャンプをする気にはなれなかったのだろう。高畑先生が参加していれば別だったかもしれないが。

「さて、特訓するに当たって聞きたいことが有るんだけど、ネギは何を鍛えたいんだ？」

テントを張り、キャンプの準備が出来るとユウはネギに質問をしてきた。

「はい、吸血鬼さんとの話し合いの結果（生徒は攻撃できないとごねたので）、停電が始まってから終わるまでの間逃げ切れれば僕の勝ちという事になりました。だから逃げる為の特訓をしたいと思います」

ユウに正体がばれないようにエヴァンジェリンのことを吸血鬼といいネギはそう答えた。この勝負の内容は両者にとって都合がいいものかもしれない。ネギは茶々丸の接近を回避して遠くに行けばいいのだし、エヴァンジェリンはネギを狩る事でうっぶんを晴らす事が出来るからだ。

「わかった。パルジ、ネギに防御強化の魔法をかけてやってくれ」

俺が考え事をしているとユウが俺にそう言ってきた。ユウには何か考えが有るみたいなのでネギに強化魔法をかけた。俺は能力強化の魔法が得意で攻撃系はあまり使うと言われている。それに対してユウはといつと...

「じゃあネギ、逃げ切れ」

ユウは魔法の射手を100本出してネギに逃げ切るように言った。ユウは攻撃魔法、特に魔法の射手を大量に出してその全てを細かく制御する事に長けているのである。さすがリリカルな世界の出身、マルチタスクは伊達ではない。

「えーと、これから逃げ切るんですか？」

いきなり100本も出てきたので腰が引けているネギにユウは言った。

「大丈夫だ。一本一本の威力は抑えているから。もっとも全部当たれば痛いけど」

「兄貴頑張ってください」

いつの間にかカモはネギの肩から降りていて、ネギにエールを送っていた。

「カモくん、逃げないで！」

「さあ、始めるぞ！」

「っつしてネギの逃げ切るための特訓は始まった。

「魔法を使って相殺してもいいんだぞ」

「無理です、そんな余裕は有りません！」

ネギは森の木々を避けながら追いかけてくる魔法の射手から逃げまくった。それから時間が過ぎて防御魔法をかけ直してくれと言われたので俺は飲み物を持ってネギの所に向かった。

「うっ、パルジさん。やっぱりユウさんはエヴァンジェリンさんよりも怖いです」

俺がネギの所に行くとネギは半泣きで俺に助けを求めてきた。

「逃げても隠れてもまるで僕の居場所が分かるかの様に魔法の射手が追って来るんです」

「ネギ、ひょっとして気づいていないのか？」

効率よく追われる事の原因をどうやらネギは気づいていないようだった。

「一体何の事です」

「ネギ、どうして俺がネギの所まで簡単に来れたと思う？」

「え？」

本当に分かっているように思っていたので俺は手に持っていたある者をネギに見せた。

「あ、GPS」

「そういう事だ。言うておくけどGPSを捨てるのは無しな。特訓にならないし迷子になったら大変だ」

俺がそう言つとネギは死刑宣告を受けたかのように石になった。こうしてネギの修行は一日中続けられ、ネギは逃げる為の能力と精神的な力を身に付けたのだった。

それと...

「魔法使いって本当にいるのでござるな」

「まあ、秘密なだけだね」

出会えなかった楓に魔法の事を見られていて、それをユウが隠蔽処
理した事に俺は気づく事は無かった。

第7話

Side Others

私の名前は月村すずか。夜の一族という吸血鬼です。でも夜の一族はお姉ちゃんとなのはちゃんの『実の』お兄さんである恭也さんの交際を巡って争いになり、その争いになのはちゃんが巻き込まれた所為でユウさんの逆鱗に触れて壊滅寸前に追い込まれて力を失ってしまいました。

ユウさんやなのはちゃんには秘密にしていますがヨーロッパに本拠地がある夜の一族は地球の魔法使いと交流があります。そして人間社会に溶け込んで地位と権力とお金を持っていた夜の一族は魔法使い族を相手に便宜をはかってその見返りにさまざまな物を得てきたという歴史もあつたのです。

でもユウさんの手によって壊滅寸前に追い込まれ、アリサちゃんの家のバニングスグループの手によって地位も権力も奪われてしまいました。

でも姉ちゃんは夜の一族の本家からは独立した立場を取っていたので何の被害も受けず、むしろ本家からの圧力がなくなったと喜んでいました。私自身も夜の一族が力を失って魔法世界に干渉が出来なくなつたからこそ日本の魔法使いの本拠地とも言えるこの麻帆良学園にくる事が出来ました。

でもいい事ばかりでは有りませんでした。魔法使いの本拠地という事は私の正体を知っている人もたくさんいるということです。もちろん魔法の事も吸血鬼の事も表に出せない秘密なので表立って私に何かをしてくる事はありませんでした。

でも私と同じクラスに魔法使いの見習いの子がいてその子は私に嫌味をよく言ってきました。もちろん私の側には親友であるのはちゃんとアリサちゃんがいるので私の事を守ってくれたので対して気にも止めていませんでした。…桜通りの吸血鬼の噂が出るまでは。

桜通りの吸血鬼の噂が広まるとその子は犯人は私だと言って影で嫌がらせをしてくるようになりました。夜の一族の力が失っていないければそんな嫌がらせも起きなかったでしょうが、もう夜の一族は力を失ってしまっていたので恐れる物はないという状況でした。

それでも何とか頑張っていたのですが新学期が始まる前の晩、とうとう私のクラスの子から吸血鬼の被害者が出てしまいました。そしてそれが引き金になり私に対する嫌がらせが悪化しそうになったのです。

偶然その場に居合わせたなのはちゃんが『お話』してくれたのでその場は収まりましたが、収まりが付かないアリサちゃんはユウさんの所まで行つて、桜通りの吸血鬼を退治するように言いに行きました。

それから桜通りの吸血鬼の出現情報は止み（3年の先輩が襲われかけたらしいという噂はありました）私の周りでは平穏を取り戻したかの様に見えました。

でもそうじゃなかったのです。停電の夜、私は以前吸血鬼に襲われた子が寮の外へ出る所を目撃しました。なのはちゃんはもう寝てしまっていたので起きていたアリサちゃんと一緒に追いかけてみるとその子は誰かに操られていました。2人がかりで何とか取り押さえる事は出来ました。でもその時になって私達は突然攻撃を受けたのです。『ようやくく本性を現しましたわね』、そう言って姿を現したのは私と同じクラスの見習い魔法使いの子でした。

「まさかバニングスさんまで吸血鬼の一味だったとは驚きです」

「何よ、確かにすずかは吸血鬼だけどそれが何なの。いきなり攻撃を仕掛けてくるアンタの方がよっぽど危険人物よ！」

私達を見下すクラスメイトにアリサちゃんは言い返しました。私はその間にユウさんの携帯電話に電話をかけてユウさんに異変を知らせる事にしました。あとは時間を稼げばと思っていたとき、突然ユウさんが面倒を見ていた魔法使いのネギくんが杖にまたがって飛んで来たのです。しかも空を飛ぶ機械少女と別の魔法使いの女の子から攻撃を受けながら。

ネギくんは私達を見ると驚いて杖の制御を乱してしまい、後ろからの攻撃を受けて墜落してしまいました。

「ネギくん大丈夫？」

「あなたは、この間のお姉さん」

私が駆け寄るとネギくんは平気そうな顔をして返事をしました。

「ネギさま離れてください！そいつは吸血鬼ですー！」
「え？」

ネギくんが無事だった事に安心したのもつかの間、今度はクラスメイトの子がネギくん私に私の正体をバラして注意を促しました。ネギくんは魔法使いの世界の英雄の子供で将来を有望視されていると以前ユウさんから聞きました。当然お近づきになりたい、パートナーになりたいと考えている女の子も大勢いるというわけです。どうやら彼女もその1人だったようです。

「お姉さんが吸血鬼？でも悪い人では無いんですね？」

ネギくんは私が吸血鬼だと聞いても怖がらずにそう聞いてきました。

「私はユウさんの『妹』の親友でユウさんとの付き合いも長いんだよ。だからネギくんの敵になるつもりは無いよ」

「そうなんですか。だったら信用します」

私がそう言つとネギくんは私の事を信じてくれました。

「ほう、魔法使いと友好的な夜の一族か。用意した手駒を潰したのはお前か、ネギを庇って私と敵対する気か？」

ネギくんを追いかけた女の子は私を見てそう言いました。話からするとこの子が桜通りの吸血鬼で私のクラスメイトを操っていたみたいです。

「そうかこいつが真犯人、桜通りの吸血鬼ね。こいつを捕まえてすずかの無実を晴らすわよ！」

アリサちゃんも私と同じ考えにいたったみたいです。乱入者の少女を捕まえようと言いました。

「だ、駄目です。この日とは元600万ドルの賞金首、吸血鬼の真祖のエヴァンジェリンさんです」

「真祖の吸血鬼……」

ネギくんがそう叫び、それを聞いたクラスメイトの子は気絶してしまいました。

「何かヤバイ相手なの？こいつするすずか」

そう言いながらアリサちゃんは護身用に渡されたデバイスを使おうとしました。このデバイスはリンカーコアという魔法を使う為の機関がなくても魔法が使えるという特殊なデバイスでユウさんのお父さんとその部下の人が開発した物です。でもあくまで護身用で戦うには出力が足りません。私も同じ物を渡されましたが2人がかりでもおそらく駄目でしょう。

「ふははははー！」

そんな時でした空から笑い声がしたのは。思わず上を見上げるとそこには顔を隠した見た事の無い魔法少女が浮いていました。

「闇夜を照らす、炎の魔法少女。リリカルリンリンただいま参上アル」
「待てー！どう見てもお前は超だろ！」

エヴァンジェリンさんは謎の魔法少女の正体に心当たりが有るみたいで魔法少女を名前で呼びました。

「私は超とかいう天才美少女科学者では無いアルね。私の事はリリカルリンリンと呼ぶコト、良いアルか」

リンリンさんはそう否定すると私達の元に降りてきました。

「故あって私は直接戦えないね。その代わりに彼女に勝つ方法を教えてアゲルネ」

「エヴァンジェリンに勝つ方法？」
「それは君達がパクティオーすればイイアルネ。そっちのお嬢ちゃんにはネギ坊主から魔力を貰って出力不足を解消できるアルヨ。ネギ坊主も前衛が増えて上手く戦えるようにナルネ」

リンリンさんは私達にそう言いました。私はパクティオーがどういふものか知っています。ネギくんとキスすることになりますがこの場を切り抜けられるのなら覚悟は出来ています。

「駄目です。見ず知らずのお姉さんに僕の厄介ごとを背負わせる訳には行きません!」

でもネギくんは反対しました。ネギくんこの考え方はユウさんに良く似ています。一緒に暮らして影響を受けているみたいですよ。

「ねえ、ネギくん。確かに私はネギくんが何を背負っているのか知らないし、背負えるかどうかとも判らない。そしてネギくんも私が背負っている物を知らないし背負えるかどうかとも判らない。でも今この時は同じ物を背負っているのよ。だから協力しましょう」

私がそう言うと、ネギくんは少し考え込みました。如何してでしょう、他の方法もある筈なのにネギくんと協力したいと言っている自分があります。吸血鬼としての本能が強い魔力を持ったネギくんに対して反応しているのかも知れません。

「分かりました。一緒に戦ってください」

「なら契約の魔法陣は私が用意するね」

ネギくんが決意するとリリカルリンリンさんが契約の魔法陣を出しました。

「黙ってパクティオーさせると思っているのか」

「なんかよく分からないけど邪魔はさせないわよ!」

エヴァンジェリンさんと一緒にいた機械少女が邪魔をしようとしてアリサちゃんが2人の前に立ちふさがりました。アリサちゃんは

機械少女の腕を掴むと向かってきた勢いを利用して機械少女をエヴァンジェリンさんの方に向かって投げました。もちろん機械少女は空中で体制を建て直し、エヴァンジェリンさんにぶつかる事は有りませんでした。でもアリサちゃんのその行動によってエヴァンジェリンさんの視界は一瞬塞がれて時間を稼ぐ事が出来ました。危険な活動をする事がある部に入るといので護身術を習っていたのが功を奏したみたいです。

私とネギくんはアリサちゃんが稼いでくれた時間を使ってパuketティオーを成功させました。

「ネギくん、私に魔力を頂戴」

「は、はい、分かりました。契約執行90秒間！ネギの従者…。お姉さんの名前、何でしたっけ？」

「月村すずかよ」

「ネギの従者『月村すずか』！」

ネギくんが呪文を唱え、私に魔力を送りました。するとデバイスの出力がどんどん上がって行きました。このデバイスはなのはちゃんのレイジングハートを元に作られました。だから今ならなのはちゃんのように変身できるはずですよ。

「いけるスノーホワイト？」

「はい、大丈夫です」

私は自分のデバイスのスノーホワイトに確認を取ると、バリアジャケットを構築して変身しました。

「ま、魔法少女…」

「ついに運命は動き出したアルね」

「すずかだけずるいわね」

私の変身を見て皆が思い思いの事を言う中私は改めてエヴァンジェリンさんと機械少女の方を向いて構えました。でも戦いには成りませんでした。

「両者、そこまでだ！」

その声と共にユウさんが空から飛んできて私たちの間に割って入って来たからです。三種の神器と呼ばれる強化武装を装備して完全戦闘形態に入ったユウさんは私たちを一瞥するところ言いました。

「悪いけど『身内』が絡んだ以上介入させて貰います」

それはここには居ない誰かに言ったようなセリフでした。こうして私達はユウさんの介入で戦う事無くこの場を乗り切る事に成功したのでした。

第8話

side
ネギ

僕には人生観が変わる出来事が何度かありました。1つ目は故郷の村が襲われてお父さんに助けられた時。2つ目は魔法学校の同級生から魔法少女のアニメを見せられてその活躍に憧れた時。そして今3つ目の出来事が目の前で起きよつとしていました。

「遅くなって済まない」

「ホントよ。今まで何をしていたのよ！」

僕達の間割って入り戦いを止めたユウさんは誰かに向かって僕の課題に介入すると宣言するとすずかさん達に話しかけました。

「2人の居場所が分からなくて取りあえず寮の部屋に向かったんだ。そうしたらなのはちゃんが寝てたので起こして話を聞こうとしたんだけど…」

「けど？」

「寝ばけたなのはちゃんに夜這いと勘違いされたんだ」

ユウさんがそう言つと夜這いの意味を知らない僕と茶々丸さんを除いて全員俯いて沈黙しました。

「それで夢だと勘違いしたなのはちゃんを寝かしつけていたら遅くなった。一体何でなのはちゃんだけ寝ていたんだ？」

「早く寝ると成長ホルモンが分泌されて胸が大きくなるって。だからなのはちゃんは胸を大きくするために早く寝るようにしているんです」

「そうか。…聞かなかつた事にしよう」

「ユウさんのぼやきにすずかさんは答えました。その話を聞くとユウさんはそれまでの事を無かった事にしてエヴァンジェリンさんの方を向きました。」

「まさかキティちゃんがネギと戦っていた吸血鬼だったとはね」「済まない、ずっと隠しておくつもりだった」

エヴァンジェリンさんは自分の正体をユウさんに知られたくなかったはずです。それが予想外の事態で正体を知られてしまった。その辛さは僕には想像できないものなのでしょう。

「キティちゃんは賞金600万ドルの賞金首…」「…」

「ユウさんに言われてエヴァンジェリンさんは辛そうに俯きました。しかしここでユウさんは予想外の事を言い出しました。」

「の子供なんだよね」「」「はい？」「」

ユウさんの言葉に僕を含めて皆さんは呆気にとたれました。いえ、傍観していたリリカルリンリンさんはニヤニヤしていました。

「15年前にネギのお父さんに打たれた吸血鬼の子供なんだろ。ネギのお父さんは君のお母さんを退治した後残されたキティちゃんの事を知って面倒を見てたんだろ。ネギのお父さんの事を調べていたら行方不明になる少し前、4歳くらいの幼女を連れまわしていた事が分かったんだ。それがキティちゃんなんだろ？」

ユウさんの言葉を聞いて僕は混乱しました。何でそんな勘違いを

しているんですけどか、お父さんが幼女を連れまわしていたとか頭のなかがごちゃごちゃになりました。

「ユウさん、エヴァンジェリンさんはこの15年間ずっとこの学園にいました」

「…そうか、赤ん坊の頃からこの学園に閉じ込められて来たのか、それは辛かったね。でももう大丈夫、その呪いは俺が解くから」

「はあ？」

混乱した頭でそれでもユウさんに正しい情報を伝えようとすると、ユウさんはさらに爆弾を投下しました。

「いや、無理ですよ。エヴァンジェリンさんの呪いは父さんが力任せにかけたんですよ。だから誰にも解けないって」

僕はそう言つとエヴァンジェリンさんの方を見ました。呪いが解けると言つのにエヴァンジェリンさんが静かなのが不思議に思ったからです。

「ふふ、そうかナギの奴はペドだったのか。だからロリはお呼びじゃないと。ふふふふふ…」

いえ、小声でブツブツと呟いていました。

「じゃあ呪いを解くね」

そんなエヴァンジェリンさんの様子を気にせずユウさんは手にしていた杖を振りました。するとエヴァンジェリンさんから煙が出てきて人の形をとっていきました。その姿は絵本のランプの魔人みたいです。

「あなたがキティちゃんを縛っている精霊ですか？」

「いかにも、契約によってこの者を登校させる役目を請け負っている」

魔人はユウさんの質問に答えました。ユウさんは魔人の返事を聞くと僕の肩に手を置いて魔人に言いました。

「あなたの契約者は亡くなりました。よってナギ・スプリングフィールドの息子であるネギ・スプリングフィールドがあなたとの契約を解約します」

「待って下さい！お父さんは生きています」

「その通りだ。契約者ナギ・スプリングフィールドはまだ生きている。よって息子であつても契約を解くことは出来ない」

「お父さんが生きている…」

幼い日、僕は死んだと言われていたお父さんに出会い助けられました。だから僕はお父さんが生きている事を信じていました。でも僕以外の人は本気でお父さんが生きているとは思っていません…。僕は今日ようやくはお父さんが生きていると言ってくれる人(?)に出会えたのです。

「やっぱり生きていたんだ」

「ユウさん、ひょっとしてお父さんの生存確認の為にあんな事を？」

僕がそう聞くとユウさんは片目を瞑って笑いました。

「さてキティちゃん、呪いを解くけどいい？」

それからユウさんはエヴァンジェリンさんにそう聞きました。

「…(ブシブシブシ)」

しかしエヴァンジェリンさんは未だに自分の世界に閉じこもっていて、精霊の事にも気づいていないようでした。

「様子がおかしい。まあ、呪いはいつでも解けるから日を改めるか」「ほお、我の呪いをいつでも解けると。まあいだらう争う気が無いのなら我も姿を消そう」

エヴァンジェリンさんの様子がおかしいのでユウさんが呪いを解くのをやめると言つと精霊は煙になって消えていきました。

「さて、今日は…いやもう口付は変わるか。とにかく学校があるのだし今日は帰って明日また話をしよう」

「なら、」の子は私達が部屋に送り届けるネ」

今日はもう休もうとユウさんがいい。リリカルリンリンさんが気絶している2人の生徒を部屋に送ると言いました。

「見ない顔(?) だけど君は誰」

「私は未来からやって来た魔法の国のプリンセス、魔法少女リリカルリンリンネ」

リリカルリンリンさんがそう名乗るとユウさんは胡散臭そうな目でリリカルリンリンリンさんを見ました。

「私はこれでもあなた達の味方ヨ。それに私は『エルトリアの魔王』のハーレムの一員ネ。ここに来るのも『ギアーズ』の姉妹の協力も有ったヨ」

「魔法少女がハーレムとか言わないで下さい。夢が壊れます」「突っ込むところはそこなんだ」

リリカルリンリンさんは訳の分からない名前を出しましたが、それ

よりも僕はハーレムをいう単語に反応して叫びました。

「そうか…、そうなのか…」

一方、ユウさんはリリカルリンリンさんの言った言葉の意味を知っているらしく、あっさりとしりカルリンリンさんの話を信じました。

「外野が多いのでいずれまた日を改めて挨拶に来るね。じゃあおやすみなさい」

ユウさんが信じたのを見てリリカルリンリンさんは2人を抱えて飛んで行ってしまいました。

「じゃあ、俺達も帰るか」

リリカルリンリンさんの姿が見えなくなるとユウさんは帰るようには言いました。

「はい、マスターは私がつれて帰ります」

「結局、すずかの汚名は返上できたの？」

「たぶん大丈夫だと思うよ」

「取りあえず無事に終わってよかったです。でも何か忘れているような…」

中途半端に終わったような気がします。僕は無事に停電の夜を乗り切る事ができました。

そして…

「ちょっと、ネギの奴は何処にいるのよ？」

「わかりやせん、でも停電がまだ終わっていないのにドンパチやって

いないって事はもしかしたら兄貴は捕まってしまったかもしねやせん。早く助けに行かないと」

「しょうがないわね、ネギまってなさいよ」

僕と行動を別にしてたカモくんがアスナさんを助けに呼んで、2人で一晩中学園内を駆けずり回っていたと知ったのは翌日学校出勤してからでした。

第9話

Side Others

ネギくんとエヴァの戦いの顛末を聞いてワシは頭を抱えた。本来の予定ならエヴァがネギくんを認めてめでたしめでたしになる筈が予定外の乱入者の連続で話が狂ってしまった。

その乱入者じゃがエヴァに操られていた子は何も覚えていないよ
うじゃったからそのままで良しとして、残る3人の処遇にワシは頭を
悩ませた。

まず変な勘違いをして話をこじれさせた挙句エヴァを見て気絶し
た見習いは魔法界に返して修行のやり直してよいじゃろう。状況の
判断が出来ておらず偏見で物事を決めた挙句、いくら魔法界のナマハ
ゲとは言エヴァを見ただけで気絶するような者は学園の実行部隊と
してやってはいけぬじゃろうからな。

次にアリサクんじゃが月村すずかの正体を知っていて普通に生活
をしておることを見て、口止めすれば問題なからう。それに彼女の実
家のバニングスはここ数年『裏』の実行部隊を持っている可能性が高
いと言われている。真偽を確かめるまでは迂闊な事は出来ないとい
う理由もあるしの。

最後に一番問題なのがすずかくんじゃ。彼女は魔法の事を知る夜
の一族の者じゃ。本来なら何の心配も要らぬはずなのだがネギくん
とパクティオーしてしまったのが問題じゃ。何しろ吸血鬼の一族で
ある夜の一族と魔法使いの恋愛は全て魔法使いが夜の一族に取り込
まれる形で結ばれてきた。

それは吸血鬼を家族に入れたくないという魔法使い側の考えと夜の一族の掟の利害が一致していたからじゃ。その今までの慣例を見ると夜の一族の娘とパクティオーしたネギくんは夜の一族に取り込まれるという事になる。

むろん本人達はその場限りで結婚とかそういうことは考えておらぬじゃろう。じゃがパクティオーしたと言ふ事実を受けて暴走する輩が出ないとも限らない。その事によって起きる騒ぎを考えると頭が痛いし、そうなった場合確実にユウくんが敵になる。

そうなるとエヴァは間違いなくユウくんの味方になるじゃろう。そしてユウくんがエヴァの呪いを解ける以上、完全復活したエヴァを敵に回して戦争が起きる。そうになったら『西』もなにかアクションを起こすじゃろうから収拾が着かなくなる恐れがある。

どうしようかと悩んでおるとそのユウくんがワシの元にやって来た。エヴァの封印の件も含めて放課後ワシの所に来るように言っておいたのじゃがもうそんな時間になっておったか。取りあえずワシの未来予想を話した上で今後の事をどうするか話をしてみよう。

「学園長、もしそんな事になっても俺はキティちゃんを戦争に巻き込んだりはしませんよ」

ワシの未来予想を話すとユウくんはあっさりそう言った。よく考えて見ればユウくんはエヴァの事を争いを知らない14歳の少女だと思っておった。ユウくんの性格を考えればエヴァを戦いに巻き込むなどありえないことじゃった。

「でももしすずかちゃんに危害をくわえようとした場合、夜の一族の戦闘部隊を壊滅させた戦力が敵に回るので覚悟して置いてください」

ユウくんの話聞いて安心したワシは続きを聞いて冷汗をかいた。月村の姉妹の味方をして夜の一族本家を壊滅寸前にまで追い込んだ謎の魔法使いの存在をすっかり失念していたからじゃ。すずかくんの姉である月村忍とユウくんの従兄である高町恭也が恋人になった事で起きた事件。月村に味方をして現れた当時10代前半の魔王と名乗る謎の魔法使い。今は20代前半であろうその魔法使いが敵にまわった場合まず間違いなくワシ等は負ける。

何しろ各地の秘密結社を叩き潰したその実力からネギくんの父親であるナギくと互角とまで言われておるのじゃから。

「まあ、すずかちゃんとネギの仮契約を解除して深く関わらないようにすれば問題ないでしょう。学園内の事ですし、上手く隠蔽できるでしょう」

ユウくんに言われてそうするしか無いとワシは思った。ユウくんもすずかくんが危険な目に遭うのは望んではない。なら協力して隠蔽するのが一番じゃ。そう結論を出してワシは落ち着きを取り戻した。じゃからユウくんを呼んだ本来の目的の目的を果たす事にした。

「つまりキティちゃんの呪いを今はまだ解いてはいけな」と
「そうじゃ。今呪いを解いてエヴァを自由にすると、彼女を危険視した連中に命を狙われる事になる」

その場合まず間違いなく襲ったほうが返り討ちになりじゃろうがそこはエヴァとの約束が有るので黙っておく。

「まあ、昨夜呪いを解こうとした時、誰にも解けない呪いと聞いていた

のにあっさり解けそうでしたからね。やっぱり解かない理由が有ったんですね」

「あっさり解けそうか？」

「ええ」

エヴァの呪いは正真正銘誰にも解く事が出来なかったものじゃ。それをあっさり解けそうとは。魔法使いとしての才能はネギくん以上かもしれないの。魔力が少ないのが欠点じゃがそこは木乃香がサポートすればよいのじゃし。

婿殿の教育方…願いが有って木乃香には魔法の事を教えぬようにしてきたが。こうなるとかなり惜しい。じゃがユウくんは木乃香の魔力を当てにしてはおらぬし今はどうしよつも無いが。

「でも修学旅行には行かせてあげてください。今のままだと学園の外には出れないでしょう。呪いの精霊と交渉すれば学業の一環である修学旅行にはいける筈ですので」

ユウくんがそう言うてきたのでワシは意識をエヴァの件に戻した。エヴァが修学旅行に行けるか。木乃香がユウくと付き合うようになった事で今『西』は荒れてるといふ。そこにエヴァまで行かせては必ず戦闘が起きる。ネギくんに新書を届けてもらう計画じゃったのだが変更した方がいいかも知れぬな。

「エヴァの呪いや今後の事を話し合わねばならぬな。エヴァの所に行くぞい」

ユウくんは学園長室に呼んだが、他のメンバーはエヴァの家に集めておる。ここは大勢を集めるには狭いし、まずはエヴァの正体を知らないユウくんだけと話しをする必要があったからの。

エヴァの事、木乃香の事、そして修学旅行の事。やはり京都行きは中止にして無難にハワイにしたほうがいいのかも知れぬな。

幕間 2

Side Others

ネギがピンチだとエロガモに助けを呼ばれたので私はネギを助けるために停電中の学園をかけた。しかし私達の知らないところで全部終わっていて、それを知らない私達はずっとネギを探し回るハメになった。エロガモの所為で朝まで学園中を走り回ったので私は寝不足だった。それでもなんとか頑張り（このかは私が爆睡していたと言っていたけど）放課後になってエヴァンジェリンの家に呼び出された。

「いいか、今回の勝負は無効だ。もっとも今回の事で事情が変わったからネギの事は狙わないでやる。その代わり私の正体をユウさんにばらしたら命は無いぞ」

私の他に今回の一件に関わったと思われるメンバーを前にエヴァンジェリンはそう言った。それにしても一年生の2人はユウさんの知り合いだったはず。いつの間に事件に関わったのだらう？

「いいけど、ユウさんの知り合いの金髪の女の子って本当に変なのしかいないわね」

「そういってお前も金髪だらうが」

1年の子のうちの1人、部活でこのか達の後輩になった金髪の子がそう言ってエヴァンジェリンが突っ込みを入れた。

「そうだよ、アリサちゃんは昔誤解からユウさんに対してお嫁さんになりたくないって言って関係がギクシャクしたことがあったでしょ。だからアリサちゃんも変なの1人だよ」

「そういつすずかもユウさんの事を魔界から召喚された魔王だと勘違いして恐れおののいた事が有ったでしょうー」

「魔界の魔王と勘違いって一体何が有ったんですか？」

2人の言い合いにネギが加わると2人はネギを見た。

「聞きたい？」

「いえ、やっぱりいいです。知るとあとが怖い気がします」

「私にとってユウさんはこのかの彼氏だけど。そんなに恐ろしい人なの？」

かのかを通して知り合いになり、ときどきケーキを焼いてくれる同い年だけど年上を感じる。私にとってはそういう人だ。エヴァンジェリンがユウさんに対してこだわりを見せるのも似たような理由なのだろう。

「とにかくだ、ユウさんに関しては余計な事はするな、いいな」

エヴァンジェリンがそう言って話を締めくくったのでユウさんに関する話は終わった。

「じゃあ、ナギの話をしたいが…、お前達はもう帰っていいぞ」

エヴァンジェリンは次にネギのお父さんの話をしようと言い出して、関係が無さそうな1年2人に帰っていいと伝えた。

「私は残って話を聞くよ。一応ネギちゃんと契約しているし。アリサちゃんはどっしりするっ」

「私だけ帰っても仕方が無いでしょう。なのはをのけものにするようで悪いけど関わらせてもらっわ」

「ふん、物好きなことだ、では話を始めるぞ。と言っても私は大した事

は知らない。ネギが行方不明になった時、もう既にこの学園に閉じ込められていたしな」

エヴァンジェリンがそう言つとネギは手をあげた。

「あの、ユウさんが調べたというお父さんが連れまわした幼女って本当にエヴァンジェリンさんじゃないんですか？」

「たしかに昔ナギの奴に付きまどっていた時期は有った。だが12、3年前なら微妙に時期が違う。たぶんほかの子だろう。それに私は幼女ではない！」

最後の部分を強調してエヴァンジェリンは言った。

「その事については当時ネギと行動を共にしていた高畑なら何か知っているのかもしれない。だがユウさんがその事に気づかない筈がない。知らないかはぐらかされた可能性が有る」

どっちにしても高畑先生は今出張中で連絡が取れない。

「学園長に聞いても同じだろうしな。あとは詠春か」

「エイシュンさん？」

ネギが聞き返すとエヴァンジェリンは頷いた。

「近衛木乃香の父親だ。高畑と共に現在行方が分かっているナギの仲間だ」

「ええ！このかのお父さんがネギのお父さんの仲間！それってこのかも魔法使いってことなの!？」

「いや、詠春の教育方針で魔法のことは知らされてはいない。お前達も気をつけろ」

それだけ注意するとエヴァンジェリンは話を戻した。

「とにかくだ、京都にいる詠春なら何か知っているかもしれない。仮に知っていなくても京都にはナギの奴の実家がある、そちらに手がかりがある可能性もある」

「京都か、お金大丈夫かな。それに休みも取らないと」

エヴァンジェリンの話を聞いてネギがぼやいたので私はネギの背中をバシバシ叩いて言っちゃった。

「大丈夫よ、今度の修学旅行の行き先は京都でしょ。その時に行けばいいのよ」

そう言って笑っていられたのだが、その後やって来た学園長じじいから修学旅行の行き先の変更を告げられて私達は叫び声を上げるのだった。

幕間3

Side Others

エヴァンジェリンの別荘の集まりがあったから数日後、私は悩んでいた。ネギの魔法の事を知ってから私は出来の悪い弟を助ける気持ちでネギの事を手助け私用と思っていた。

でも、ネギの事を導いているのはユウさんで、いつの間にかネギの側にネギを助けてくれる女の子までいた。

それに対して私は空回りしているだけで何も出来ていない。私が何もしなくてもいいのなら、もう面倒を見るのをやめてもいいのだけれども、それはどこかモヤモヤして出来なかった。

私はそうやって悩んで休みの日なのにベッドの上で寝転がっていた。そうして何をするでもなくぼーっとしていると携帯電話がなった。クラスの柿崎から電話がかかってきたのだ。

「休みの日にどうしたの？」

『大変だよーこのかとネギくんがデートしているのよー！』

「そんなわけ無いじゃない」

ユウさんがいるのにこのかがガキとは言え他の男と2人で出かけるわけが無い。大方、今その場にいないだけでユウさんも一緒にいるのだらう。その事を伝えると私は携帯を切った。その後寝転がる気になれずに私は外をブラブラする事にした。

そしてなんの目的も無く歩いていると、男の子に声をかけられた。

「あれ、アスナちゃんじゃない」

「え、ユウさん？」

声をかけてきたのはこのかと一緒にいると思っていたユウさんだった。

「あれ、このかと一緒にじゃないの？」

「今日はそんな約束はしていないけど。今日は木乃香さんはネギと一緒にのはずだよ。修学旅行の買い物に行っていたからね」

驚く私にユウさんはそう言った。

「一緒に行かなかったんですか」

「最初はそのつもりだったけど、カモがね」

「あのエロガモが何かやらかしたんですか？」

もしそうなら許さないと意気込む私にユウさんはどこか遠くを見るような顔でこう言った。

「カモには妹がいてね、カモはその妹を養うためにお金を稼いでいたんだ。それで面倒を見るからこっちに呼び寄せることにして、カモは妹に手紙を書いたんだ。その手紙の返事が今朝きたのだけれども…」

「けれども？」

「カモが留守中にカモの妹に恋人が出来てね。一緒にロンドンで暮らすって返事がきてカモが落ち込んでしまったんだ」

それは…なんと云えばいいのか。

「俺も『妹』がいるからカモの気持ちが出来てね。それで今まで慰めていたんだよ。今はカモが1人にして欲しいと言っから部屋に置いて出てきた所なんだ」

「そうだったんですか」

「あ、パルジは1人でどこかに行かせた。あいつネギの厄介後とに關してどう関わればいいのか悩んでいるみたいだから1人で考える時間を与えたんだ」

ネギの厄介ごとと聞いて私はどきっとした。パルジさんも同じことで悩んでいたからだ。

「ユウさん、私の話を聞いてくれませんか」

パルジさんに考える時間を与えたというのならきつとパルジさんの悩みの相談に乗ったのだらう。だから私の悩みも聞いてもらうことにした。

「そうか、力になりたいのに役に立たないから、このまま関わってもいいのか悩んでいるのか」

私の話を聞いてユウさんはそう話をまとめた。

「俺から言わせて貰えば、ネギの学校での生活のサポートをしてくれるだけでも十分助かっているんだけどね」

そう言つとユウさんは近くの自販機からジュースを2つ買ってきて、1つを私に渡した。

「ありがとうございます」

「俺から言えるのはやりたい様にすればいいかな。別に関わらないといけないとか、関わってはいけないとかそういう事情は無いでしょ。ならアスナちゃんのしたいようにすればいい。足手まといだからや邪魔にならないければ、出来ない事がないから関われないというのは無いよ」

マイナスにならなければゼロでもいいとユウさんは言った。

「それでも何かできる事が欲しいというなら力になるよ」

前々から思っていたけれどもユウさんは同い年とは思えないほどの包容力がある。私が敬語で話してしまうのもその所為だ。きっと後20年もすればダンディなオジサマになるだろう。

その姿を想像して私は首を振った。ユウさんはこのかの彼氏なのに私は何を考えているのだろう。

「アスナちゃん！ストップ、ストップ」

ユウさんに声をかけられて私は正気に戻った。どうやら私は近くの木に頭をぶつけてるのを繰り返していたようだ。

「ほんと、大丈夫？」

「大丈夫です、はい！」

私の奇行を見てユウさんは心配したようだ。私はどう誤魔化せばいいのか困っていると、携帯が鳴った。

「あ、ちょっとごめんさん」

これ幸いと携帯を開いて送られた写メを見た。そしてぶつと噴出した。そこにはネギとこのかが同じジュースを2人で飲んでいる姿が映し出されていたからだ。

『アスナ大変だよ、劇的な証拠だよ』

どつやら現場を押さえた柿崎が送ってきたようだ。

「ちょっと、今ここにユウさんがいるのよ」

『え、それは不味いよ。もし写メを見られたらどつするのよ』

私達が言い争っていると、さらに爆弾が投下された。

『柿崎大変だよ。このかがユウさんとは遊びの関係だと言っているよ』

「この声は釘宮か、声が大きいからこちらにまで聞こえてきた。

「アスナちゃん、様子がおかしいけどどうかしたの？」

まずい、今の会話は聞かれていなかったただらうけどこのままだと修羅場になる。

「ごめんさい、急用が来ました。これで失礼します。相談に乗ってくれてありがとうございます」

「あ、うん。気をつけてね」

私はそう言うたダッシュしてこの場から走り去った。そして私は柿崎達と合流してこのかの元に行った。

合流したこのかはネギに膝枕をして寝かしていた。その様子は私の知るいつものこのかそのものだった。ネギはと私の誕生日プレゼントを探すために買い物に来たといい、私にプレゼントを渡してきた。

その時は私はこのかに何も聞けなかった。

次の日、ユウさんがこのかに頼まれて用意してくれた誕生日ケーキを食べた時私はケーキの味が感じられないことに気づいた。

いや、正確には味は分かるのだけれどもユウさんがこのかに頼まれて作ったものだと聞いて味を感じる所ではなくなっているのだ。

真実を聞かないといけない、そう思いつつこのかに話を聞けないまま時は流れた。そして修学旅行初日、事件は起こった。

第1話

side ヌウ

最近ネギのクラスの様子がおかしい。アスナちゃんは挙動不審だし、木乃香さんは何か隠れてコソコソしている。俺とはあまり縁が無い他の子も俺に隠れて何か噂をしているみたいだ。平常運転なのは旅行に出られると浮かれているキティちゃん達くらいなものか。

あと、カモがようやく復活した。

「旦那、ご心配をおかけしやした。妹が独り立ちした以上、これからは兄貴の為に働かせていただきやす」

多少芝居がかっているけれども、復活したカモをみて安心した。落ち込んだままだったらカモは留守番させようと思っていたからだ。

「元気になってくれて嬉しいよ。ところで修学旅行だけどオコジヨを旅行で海外に持ち出すのは無理があるので返送してもらっけどいいか？」

「はい、旦那のお考えを信用します」

前と比べてエロさがなくなっていて本当に大丈夫かと不安になってきたけれども、真面目になったのなら良いかと思いなおして俺はカモに魔法をかけてみた。

『旦那、これは一体どういっしょとでっ』

「人間に化けさせると色々と面倒だから缶バッジになってもらった。これならネギの服に取り付けければ何処でも一緒にいられるだろ。税関を抜けたら元に戻すからそれまで我慢していてくれ」

『そついうことでしたら、我慢いたしやす』

俺の魔法で缶バッジになったカモにそう説明した。後はエリザベスをなのはちゃんに預ければ旅行の準備は完了か。

…エリザベスというのは俺が部屋で育てている鉢植えの名前だ。本名はプリンセス・エリゼベス2世で以前育てていたエリザベスという鉢植えから取れた種から育てた2世だ。実は魔法植物で人間の言葉が分かる賢い植物だったりする。

こうして旅行当日、俺達のクラスはネギのクラスと共に飛行機で空の上を飛んでいた。

「何でまた女子のクラスと一緒になんだ？学校が違うだろうに…」

「建前は急遽行き先を変更したから飛行機の手配に余裕が無かったんだろっ」

「本音は？」

「俺達にネギとキティちゃんの面倒を見ると言うことだろ」

「俺には関係ないだろ。女子との境界線にいる所為でクラスの視線が痛いんだぞ」

飛行機の座席で俺とパルジはそんな事を話していた。俺のクラスは担任を含めて俺とパルジを除いて一般人だ。彼女が欲しくてがつつくラノベ風男子高校生の一步手前で女の子と仲良くなりたいたいけどどうすれば良いのか分からないでモジモジしている思春期真っ盛りである。

だから女子地の境界線の座席に座っているパルジに嫉妬の視線が集中するのである。

…パルジだけに、だ。

俺は木乃香さんという彼女がいるので今の所嫉妬の視線にさらされていない。むしろ『学園長の孫』と恋人関係になったことで尊敬されている節がある。それにお菓子作りのスキルで恋する女性の援護をしてカップル誕生の手助けをしてきたので敵に回すと不味いと思われている。

逆にパルジは俺と仲がいいことで行動を共にして女子と触れ合う機会が多いので嫉妬されている。春休みにネギの買物に付き合った後パルジはかなり羨ましがられた。その後アスナちゃんと仲良くなったので嫉妬されている。それが今の状態を生み出しているのである。

「ま、ネギのクラスは4/5くらいは彼氏いないみたいだからチャンスかもな」

「むしろ中学の女子校で6/7人も彼氏持ちがいる事が驚きだよ」

そんなたわいのない事を話しながら、キャビンアテンダントの女性がサービスと言って渡してきた飲み物を口にして…、吐き出した。

「おい、汚いだろ」

文句をいうパルジを無視して俺はパルジの飲み物を調べた。そして俺の飲み物と同様に薬が入っているのを確認すると立ちあがって大声で叫んだ。

「皆、配られた飲み物を飲むな！変なものが混じっている！」

しかし時既に遅く、殆どが飲み物を飲んだ後で眠り込んでいた。無事なのは俺のクラスで2人。ネギのクラスで3人…。あとネギのクラスで狸ね入りが何人か。

ネギは薬にやられて眠っているし、キティちゃんも俺が魔力を封じていた所為で抵抗力を失って眠ってしまったている。

「これはまずいな。俺はちょっと外の様子を見てくるから皆は寝ている連中を起こしてみてくれ。あとキャビンアテンダントが配った飲み物が怪しいから乗務員は誰も中に入れるな」

そういい残すと俺は一人で操縦室へ向かった。乗客全員を眠らせたのなら飛行機ごと何処かに連れ去るのが目的だと考えたからだ。その場合戦闘も考慮して1人の方が都合が良かった。

しかし俺の予想は外れていた、旅客機の乗務員は全員眠らされていた…、パイロットも含めて。

操縦室の席にシートベルトで固定されたパイロットをすぐに起こすのは無理だとみて俺は計器を見た。しかし飛行機の操縦席に入った事は無いから当然計器を見てもちんぷんかんぷんだった。かろうじて緯度・経度、そして高度は分かったけれどもそれが正常かどうかの判断もつかなかった。

自分ひとりではどうしようも無いと判断すると、俺は外部に連絡を取る事にした。しかし突然アラーム音がして旅客機は墜落し始めた。

原因は分からないが、このままだと不味いのは確かなので俺は前方の窓を魔法でぶち破って外に出た。そして戦闘形態に変身すると墜落していく旅客機を受け止めた。

と言っても、何トン、何十トンもある旅客機を受け止める事なんて出来るはずも無く。以前教えて貰った重力魔法で旅客機の重さを軽減して、背中に装備した機械翼の力を借りてゆっくりと不時着するの

が精一杯だった。

それでも何とか海の上に旅客機を不時着させると俺は皆と合流するために旅客機の内部に戻ろうとした。そしてその瞬間何者かの攻撃を受けて俺は海の中に落ちた。その衝撃で無理をさせていた機械翼は完全に壊れてしまった。

旅客機にかけた重力魔法はまだしばらく解ける事は無い。俺がいなくてもしばらくは海に沈む事は無いだろう。俺はキティちゃんの封印を解くと海の底に向かって沈んでいった。

第2話

side パルジ

自分が主人公だと思ったことは無い、ただ生まれが特別だっただけだ。ユウの行動を見てきてそう思い知らされた。

原作なら京都に行くはずの修学旅行。しかしネギのクラスは俺達のクラスと一緒にハワイに向かっている。これもユウが『近衛木乃香』と付き合うようになったのが原因だ。

そしてその道中でトラブルが起きて、ユウはそれを解決するために行ってしまった。オリ主とはああいう存在を指すのだろう。

嫉妬すらできずにそう達観していると、ロボゆえに眠り薬入りの飲み物を飲まず起きていた茶々丸がエヴァンジェリンの座席のシートベルトをしめていた。

「コクピットで戦闘が起きた場合、機体が揺れる可能性が高いです。ですからシートベルトで体を固定しています」

茶々丸の話聞いてそれもそうかと思った。飛んでいる状況下で大勢の寝ている人間を連れて脱出は不可能だ。なら寝ている連中をシートベルトで固定した方がまだいい。

俺は他に起きているメンバーと協力して寝ているクラスメイにシートベルトをかけていった。そして全員のシートベルトをかけ終わったとき。飛行機は突然墜落し始めた。

落下する物体の内部にいる時、中は無重力状態になると言う。俺は

今まさにその状況を体験していた。幸い寝ている連中はシートベルトのおかげで体を放り出されていない。起きていたメンバーは座席にしがみ付いたか茶々丸がフオローしてくれている。

しかしこのまま飛行機が墜落したら皆お陀仏だ。一瞬の間にそう考えていると、狸寝入りをしていた刹那がシートベルトを外して木乃香の所に飛び込んだ。そして神鳴流の技で飛行機の壁をぶち破ると木乃香を抱えて飛び出していった。

刹那は木乃香の護衛だから木乃香1人を優先してもおかしくない。けれども上空を飛んでいる飛行機に穴が開いたら気圧さで飛行機の中のもの外に噴出してしまつ。

しかし飛行機に穴が空いても噴出さなかった。その事におかしいと思ひ、窓から外を見てもっと驚いた。飛行機は気圧差がなくなるくらい下に落ちていた。それもかなりゆっくりと。

そんな事はいえないと混乱していると茶々丸の声が聞こえた。

「これは…現在のこの飛行機の重力は限りなく0Gに近い状態です。おそらく重力魔法を使用していると思われます」

重力魔法…、ネギまの登場人物で重力魔法を使うのは紅き翼のアルビレオだ。しかし彼がこの場に現れる訳が無い。いや、ユウがいた。ユウは図書館島の大司書長であるアルビレオから魔法を教わったはず。重力魔法を使ってもおかしくは無い。

結局美味しい所はユウが持って行ったのか。飛行機が海面に着いて、ユウがこっちに向かってくるのを見て俺はそう思った。

その時だった、飛んでいたユウが突然攻撃を受けて俺の目の前で海

に落ちて行った。そしてユウはそのまま上がっては来なかった。俺はその様子を目の当たりにして動く事が出来なかった。

海の上を漂っていた俺達が救助されたのはそれから数時間後の事だった。俺は魔法の事を知る関係者に事情を説明させられていた。

「それでユウさんは海に落ちて行方不明。近衛木乃香は桜咲刹那と共に脱出したまま戻ってこずか」

事情を聞いたエヴァは怒りを抑えながら事態の確認をした。

「それでネギ、学園長はなんて言っているんだ？」

「はい、行方不明の3人は皆さんには怪我で先に病院に運ばれた事にして、こっそり搜索するそうです。僕達はこのまま『大人しく』学園に戻るよに言われています」

「ふん、『大人しく』は私に向かってか。確かに今なら呪いをぶっちぎって自由になることは可能だ。が、ユウさんの顔を多々て『大人しく』学園に戻る事にしよう。」

学園長の伝言を聞いたエヴァは余裕の表情でそう言った。ユウの事を心配するようではなかった。

「ちょっと、アンタはユウさんの事が心配じゃないの？」

アスナも同様の事を思いエヴァに詰め寄った。

「これだから魔法の素人は。ユウさんの無事はそのオコジョバツジは証明しているだろう」

「え？」

エヴァがバッジになった力モを指してそう言つと、呆れるように説明した。

「私の呪いの様に精霊と契約してかけたものは術者が死んでも精霊が呪いを維持するので解けたりはしない。だからこそユウさんが精霊に生死確認するまでナギが死んでいると皆思っていた。だがオコジョバッジの魔法はユウさんが自身の魔力でかけた物。もしユウさんが死んでいたらオコジョバッジは元のオコジョに戻っているはずだ。つまりユウさんはまだ生きている。そして私にかけた封印を解く余裕があるのだから恐らく余裕もあるはずだ」

「じゃあどうして戻ってこないんですか！」

「攻撃を受けたのだらう。おそらく死んだ振りだ。それに近衛木乃香が行方不明なのだからそっちに言ったのだらう。私達が出来る事は何も無い、『大人しく』学園に戻るぞ」

エヴァがそう言つと俺達の間には沈黙が訪れた。

「結局主人公はユウと言つことか。でも仕方が無いか。ユウが攻撃を受けて海に落ちたとき死んだかもしれないと思つたんだ。その事が怖くて俺は動けなかった。結局俺には物語りに関わる資格は無いんだ」

俺の独白を皆は静かに聞いていた。

第3話

side
ネギ

墜落(?)した飛行機から救助された僕達は救助船に乗ってハワイに着いた。学園長からの連絡だと修学旅行は中止になった。そして今日は予約していたホテルに泊まり、明日飛行機で日本に帰る事になった。

ハワイのホテルに着いたのが夕方で晚ごはんまでの僅かな間ホテルの中のみ自由行動になった。でもユウさん達が行方不明だから皆割り振られた部屋で静かにしていた。

…一部の事情を知る人を除いて。

ホテルのロビーで僕はアスナさんとエヴァンジェリンさんと後ろに茶々丸さんと今後の事を話していた。

「それで、アンタはこのかを助けには行かないの？」

「はい、行きません。学園長は残りの生徒を無事に学園まで送り届けるのが僕の仕事だと言いました」

「アンタはそれでいいの？」

「でも学園長の言いつけです」

興奮するアスナさんに対して僕は正論を盾に言い返しました。

「あきらめろ、神楽坂明日菜。どのみち近衛木乃香の居場所は分からないんだ」

「それはそうだけど。エヴァンジェリン、アンタの力でどうにかできないの。？封印は解けているんでしょ」

宥めるエヴァンジェリンさんにアスナさんはそう聞きました。

「何の媒介も無しには無理だ。それにむかつく事だが私は学園長の指示に従う事で呪いの影響から逃れている。もしホテルの外に出たら呪いが私の体を蝕むだろう」

「このか、無事だといいいんだけど」

「連れ去ったのが桜咲刹那ならその心配は無いはずだ。むしろユウさんと桜咲刹那がぶつかった場合の方が心配だ」

エヴァンジェリンさんはそう言つと席を立ちました。

「これ以上は話をしても無駄だ。私は団体行動に戻らせて貰つよ」

エヴァンジェリンさんは部屋に戻ろうとしましたが立ち止まって辺りを見回しました。

「おかしいな、人気がるで無い」

確かに魔法の事を話すので認識障害の魔法を使ったけれども、あれは人を遠ざける魔法ではないはず。

「あ、でもこっちに人が向かってきているわよ。偶然じゃない？」

アスナさんの言う通り。金髪の白人のお姉さんがこちらに向かつて歩いてきました。そしてエヴァンジェリンさんの前に立つとエヴァンジェリンさんの事を凝視しました。

「貴様何者だ？ 堅気の者では無いだろ」

臨戦態勢をとるエヴァンジェリンさんを見ても気にせず女の人

はエヴァンジェリンを抱きしめて頬ずりをしました。

「あなたがキティちゃんね。写真で見たとおり可愛いわ。ねえ私の妹にならない」

「何なんだ貴様は！やめろ放せ！」

暴れるエヴァンジェリンさんを力づくで押さえ込み女の人は話を続けました。

『西の連中』がキティちゃんを口実に戦争を始めようとしているからキティちゃんを隠せてエウから連絡が着たんだ。だから『私』が迎えに来たのよ。さあ、行きましょ」

女の人がそう言うくとエヴァンジェリンさんは暴れるのをやめました。

「確かに私がここで自由にしていることが余所にはれると問題になるが…。だからと言って突然現れたお前を信用できるか！それにエウさんからお前みたいなのは知り合いがいる事を聞いたことも無いぞ」

エヴァンジェリンさんがそう言うくと、女の方は写真を取り出してこう言いました。

「昔私がエウと付き合っていた時の写真よ。これで知り合いだと信じてください」

「エウさんの恋人…」

「ちよと、エウさんはこのかと付き合っているのよ。変な事を言わないでよ」

写真を見せられたエヴァンジェリンさんは炭化してアスナさんは叫びました。

「昔って言ったでしょ。ユウが麻帆良学園に転校する前に別れたわよ」

女の人がそう言つと自己紹介をしました。

「始めまして私はアレッシア・ゼーゲブレヒト・テッサロッサ。ユウと同じ年だから貴女とも同じ年齢のはずよ。アレッシアって呼んでね」「ユウさんと同じ年？でもどう見ても高校生以上…。あ、でも僕のクラスにも中学生に見えない人は何人かいました」

アレッシアさんの見た目はどう見ても高校生以上に見えました。でも僕のクラスにも委員長さんや朝倉さんや龍宮さんや長瀬さんのような人がいましたので気にしない事にしました。

「とにかく、ここにいと面倒な事になるから私と一緒に行きましょう。大丈夫、退屈はさせないわ。修学旅行中に声をかけるつもりでいろいろと用意してあるから。ようやく見つけた私好みの女の子、たっぷり可愛がつてあげるわ」

「こいつは、やばい。茶々丸！助ける！」

「はい、マスター」

アレッシアさんの様子に恐怖したエヴァンジェリンさんは茶々丸さんに助けを求めました。

「邪魔しないでよ」

向かってくる茶々丸さんをアレッシアさんはエヴァンジェリンさんを抱きかかえたまま、片手一本で投げ飛ばしました。

「んん」

「あの茶々丸さんを投げ飛ばした」

「何を驚いているの？この程度なら余裕でしょ」

「気をつける！さっきから全力で抜け出そうとしてもびくともしないんだ」

エヴァンジェリンさんは封印が解けて全力を出せるはずです。そのエヴァンジェリンさんが抜け出せないって、一体どれだけの力が有るのでしょうか？

「ネギ、お前も見えていないで助ける！生徒がさらわれそうになっているんだぞ」

「あ、はい！行きます武装解除！」

エヴァンジェリンさんを助けるために僕は武装解除の魔法を使いました。けれども何も置きませんでした。

「ああ、AMF発生装置って言う魔法が使えなくなる機械を使っているから魔法は使えないわよ。ちなみにそのロボ子を投げとばしたのは合気の技ね」

「魔法で力を強化出来無かったから抜け出せないのか。今の私の力は見た目と同じ10歳の少女と言う訳か」

エヴァンジェリンさんがそう言うつとアレシアさんはエヴァンジェリンさんを見つめました。

「10歳？私と同じ歳だと思っていたのに本当は10歳だったの」「ひい！誰でもいい助けてくれ！」

10歳と言う言葉に反応したアレシアさんに見つけられてエヴァンジェリンさんは悲鳴を上げました。

「アニキ、600万ドルの賞金首の面影は跡形も無いッスね」

オコジヨバツジと化して僕の服にくっ付いていたカモくんがそう言いました。

「さあ、お姉さんと行きましょう、悪い奴等から守ってあげる。ただその間私の妹になってくれれば言いだけよ」

「いやあああ!!!」

悲鳴を上げるエヴァンジェリンさんを連れて行こうとするアレツシアさん。そのとき絶対絶命のエヴァンジェリンさんに救いの手が現れました。

「いい加減にしないでー」

突然メイドさんが現れてアレツシアさんの後頭部を叩いて気絶させたのです。

「ウチのプレデターが迷惑をかけました。私はボスの…高町ユウさまに忠誠を誓う者の一人ユキシロといます」

白い肌と髪に赤い目をしたメイドさんはエヴァンジェリンさんを解放するとそう名乗りました。

「ユウさんに忠誠？」

「はい、とはいえ普段はこの変質者の所で侍女として働いていますが」

ユキシロさんは綺麗な動作でお辞儀をしました。

「さて、キティ様を保護するようにボスから正式な命令を受けたのは私です。私の仲間がこちらにやってくる西の刺客を振り返り討ちするま

で念のため私が張った結界の中に隠れていてください」

「ねえ、ユウさんと連絡をとったって言う事はこのかの事を聞いていない？」

エヴァンジェリンさんを隠そうとするユキシロさんにアスナさんは「このかさんの事を聞きました」。

「そうですね。ハワイー帯は昔日本とアメリカの間で起きた戦争の戦場だった事は知っていますか。戦後この辺りで戦死した兵隊さんの霊を鎮めたり悪霊と化した者を払う為に西の対魔師がハワイまで出張ってきたことが有ったそうです。その時使っていた隠れ家に居るそうです」

「それは何処なのー」
「さあ？詳しい場所までは聞いていません。ですが『2人とも』つれて帰ると言っていましたので大丈夫でしょう。あ、今別働隊が西の刺客を撃退したみたいです。陸に上がる前に海上で迎撃したので簡単だったと言っています」

そう言つとユキシロさんはアレクシアさんを背負いました。

「どつやらただお騒がせをしただけでしたね。この通り謝罪します。それと今回の事は海外に出てきた西の対魔師が西とも東とも関係ない第3勢力にやられたという事にする予定です。ですのであなた達は知らぬ存ぜぬで通してください」

それだけ言つとユキシロさんはアレクシアさんを連れてホテルの外に出て行きました。

「なんか嵐のような人たちだったわね。所であの人たちが言っていた『西』ってなんなの？その連中がこのかを連れ去ったの？」

『西』つまりは関西呪術協会の事だ。予想通り近衛木乃香の実家が黒

幕か」

「ええ、このかの実家が黒幕！」

「詳しい話を聞いておくべきだったな」

エヴァンジェリンさんの説明にアスナさんは驚きました。

「空気の所に行くぞ。ユウさんと同室のあいっならあの連中の事を何か知っているかもしれない」

「空気ってパルジさんの事ですか？エヴァンジェリンさん酷いですよ」

そう言いながら僕達はパルジさんの所に向かいました。けれどもパルジさんは何も知らず、エヴァンジェリンさんの八つ当たりを受けただけで終わりました。